

清良記

廿五之

省務商農
書圖和
號一第
册共

和書門
八三
二一
一〇一
五六九五
册架函號類

庫·文閣內
五八
一函三一
一五
二五
架册號

內閣文庫	
番號	和 8315
冊數	15 (12)
函號	151 126

和史
卷五



清良記卷第二十三目錄

一岡本合戰之事

一橘合戰之事付河野通直と土居の音札事

一縁越合戰付土居似水討死之事并薰藏主悪口之事

一薰藏主事

一土居藏人利口之事

一浦戸其外生捕之者被助土列の帰事

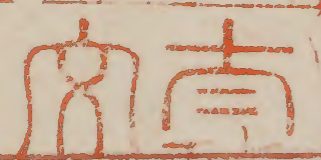
一芝作州偽て鱈之口故遁る事

一西園寺殿北之川を可被攻評定之事

一豊後大友義秋勢狼藉之事

一奥成北之川故取返之事

一豊後大友義秋勢狼藉之事



豊後大友義秋勢狼藉之事

清良記卷第二十三

岡本合戦之事

天正九年五月廿三夜を月待として出家山伏大森に登城し
 諸侍出仕して本丸権現堂より六間に坐敷又居盈より惣
 して毎月廿三日の暮より灵妙院日谷山の僧秀榮登城し
 翌廿四日の爰宿講法勤有妙く里々る如く松宗の遠見番
 人走來て中々るる思本乃城今看より里異るる神威鳴く如
 ハ西麓右夷つと趣正討々々々藤右尉門心誓り如と仕出
 うと申々きハ清良関て具異成中うハいう小と尋々先
 二三の丸ハいう如く志剛まりて本丸より火在阿まき所
 とも一突聲るとも関ハ海々思き多るやうとも有る
 唱ハ志のまらぬ如く何根不審なる様子又如とハハ
 清良はくくや々葉一扱ハ藤右尉つ討討りハハハハ

定土佐方此考細引入したると覺ゆつて當番此侍を馳向
く見よとありきハ漸りぬとく川流喜左兩つ土居十右東
同大炊之助彼是廿七騎物の具矢くせうため之使番子也
土居小次郎同跡左郎走着て是或見きを業子ふ遠元親勢
百騎斗本丸一引入て守邦の候食事取中とせんとし西
ハ三ノ丸ニ出て警あして居りし元來彼聴病多て愁
ある事仕出来といふ所んん今ハ業一好る神子
て方刀残杖又衛て居る知ハ河原流と近付きて西
かゝふ大事仕出させめひ命銭的ニ掛給ふ天魔の不
為なる一し急土居殿く此来てちんト新中よ然くそ
只と業あさ首を削て持来さへしと業色或驚て感し
きまハ西ハ元來二思業まで居りし禮ハ河原の言を
例て嬉しき思ひもかくそ業入此間清良忍満前自

分を任せ置きて河原と打はきて大森ハ出さるり河土
居小次郎且程と母又お困ませ高引立り清良かく
とやせハ身神ぬこして藤右あつて一間ある所は押
込置けり岡本乃城も土佐方の引入勢侍大將虎之助是
を候てぬハ藤右あつてううくハたをうりきとく二
三の丸一打出西り妻子質子取土居方此者ともみ打て
ゆり星火花をちりりりり土佐方ハ西り人質ハ取ら
本丸に引籠りたり其深田中野ハの加番ハ間板島能
前より七十余騎こ名なきハ被等もき着て東西あり
攻登り鎌熊手取打り常時を破り逆茂木切切崩せと
すきハ互ニ堀一重取阻く突つて打合しける業ハ土居
の侍大内小越後守有馬の木村源三郎あ人ハ小耳の根と
弓手より業ハ一打通さきハ近き兵助ハ弓手の眼同類

先攻二ヶ所より多向ふさ海に鉄炮を討まらざるを以て
三人と母を命守りて後と耳に聞かざるに其介伴与
方亦余人うらまひ子願餘多出来たり土佐方三十八人討取て
其旗差物破破しく土居方一切取らるかくて土佐方玉葉打
はくし鎧長刀を以て矢校間より突出せし奪取切折らる
石弓破發し材木など破投落し死に相ひしはるる
寄るも心は夜明るに城は火をうけて壺人毛残りて焼殺
せざる其後不取合して巻詰てて居るを獲

橘合戦之事

清良是を國家に子良後破集め評議しるるに此以前交
のしよ山内を討し時千五百余騎よて来りおれに今厚に
定多三千余騎と向し岡本奥に野原に森奥の川伽は表
に相圍は根柢を揚し為所い子細有敵を撃つるを教

さねは岡本に押寄陣取敷隙のしを虎之助を推崩して軍神
の血祭をまゝ魚しうらとてや者とも軍の用意せしめて未
明に權現堂に社参有てね三嶋大明神を伏拜し岡本の麓
堂り内城上橘八幡の北より打ちりたる土佐方虎之助り
此勢のありさぬ馬物臭は音を聞て只今此城攻落さる
んて周章翹り又宵より寄たりし武士とも此小城より
孤今と攻落さて面目をるさる多也とて一拵揃んとする
解るまの清良委為聞て其敵の分際其修置しよ何程
乃変とり仕出さへき前の一押し居る若跡勢通く其
時一接を考へし大軍の前れ小事に覺折事ありき根柢の
土佐勢何万弱寄来といふもと元親り領内三ヶ國志士を
多し日本を引清て戦ても謀を以て勝事軍の習元親
り者とも樊噲破働とも何程此事ありあるは打破する

掌の内之相豊前守元親より内通有とさけいも據と見
まむ為とて主水成中賜通正へつらハ其言葉は河野軍
法度と流無ゆ法清良好知致も所なきた所こ口こ此押へ
は兵ちりて今日此軍はわ年前無勢也とまきと母貴方所持
分の岡本の城を元親方へ京府まおもくきれいさく心
苦みつんと推量中一某忽助来り定而土佐將ハ芝源
三郎因左京進案内者や一多原田澤松の写へ可打向橋子
以芝一角又子四郎右衛門奥成北の川を社先子仕りん
沢查口を弥八殿と交くさせき縁の城を土居似水
よりめさせておくと母弥次郎殿と指加へらとみつん
引通正の謀の表り曾我孫は遊軍は旗を立てせ
おる一ませ元親勢ハ何万騎も向ひ共此土居母任
せ道さく一と取取て教るく一之會きおる委細心得

存多や返事し〜く中々さいさおろ〜事也夜半漸明
うとに成る東城遙く見渡せハ河霧小まき移て誰や
あ〜孫も薄木表の東西廿余町南北五六所の間透る
そなく見えたるハ朝は置るふ〜露はさ〜出る日影うの
り馬物の具は金物に耀く〜見え〜肝を冷〜る程
り也土居是と見やりて款ハ人数〜そなく武者押の跡も
見えハ味方は手引するとのあをを早先勢ハ城攻め
せ相号の火と立其上度く乃軍は旗頭西園寺殿後詰あ
て公廣の領内三分一ハ土佐へ取けま〜今日の大將ハ我
領内ありと思ひ心控くそあ〜〜さ〜ハ我備を立直と
とて善家六郎兵衛櫻井止たぬハ川を北へ渡り小谷田
の山隈に陣取清良の旗本のとくは備へ若敵の子細あり
此方より同士軍を〜て可見との謀ハ新方より右京進ハ

南の尾崎ハ階の前ニ引分て是程其外四百五十挺の鉄砲
ハ橋北岸の類ニ柴條をよと懸懸しよと漸々後
高く三重に引うらり残百五十挺の筒をハ堂以後より西
の井口と云ふと藪の中ニかくし彼是六百挺の筒ハ早足
の仕掛よて込替く三放ツハ一通りくしとくしとくし打
つくし但五間十間一敵を追く引付て五人組の頭の
下知を削て矢放をせよ頭の下知なき先ニ多敵の大將
と見しり打べうらり臆病なる者ハ間遠なる敵を早
打するその也是をよく制すし五人組の頭ハ其の聲を
削て下知をへしうきこれ千八百放りていいうみまづを
た敵千五百ハ打へしとてそらく一分入又追うけの觸
筒をハ後方初ニ前ニ置らうし烟下に後の方打あくる
らんと委云含相鎗ニ成り敵味方相挑まいつとの如く

農務

鉄砲よて入替は足怪三度と入替り友ハ鉄砲を捨と刀の
勝原をさくし三度不替さるハ縦大將討らる筒を捨
らうらと細り改方を定め扱土居家の小旗をハ芝の
中ニ引くし霄ハ河添り打取し土佐方虎之介ハ旗
指物を衝立ひらめりし見をたれハ土佐方の大將久武
を始め諸勢とを敵ハ一人もあまきそや心得て安堵し甲も
削て立させあうらに扇つしひるしとて大勢の者ハ後
とよせ来りかきまらふ所ハ馬上三騎雜兵五十斗引率
し大將と見えて大の男甲冑を不着檜笠をうらり味方
陣取四五町格出て巴本城の麓井口弼心置る馬をせや免
さめいつそ来りくる清良是を見てかくし置る足輕
ともハ鉄砲打せん為めハ近習の中より二三人走むし
古藤田より忍ひよりたらぬりよて井ハ溝傳ひはりま

農務

そと有々さへ弟のそと味方のうけより走さうめて相待
ふれ彼者近くと棄よせ清良の陣所へむうひ浦戸虎と助
と始め津の高嶋来名山川南岡の人々の堅固みおさする
是ハ大高沙新藏人也大将より久武内藏助親信佐竹信濃
守親宗同太郎兵衛新定河波讃岐の諸勢三千八百余騎雜
兵一万三千人也といふ所は迫目内藏助は先をゆいて胸
板を後へはと打振あれい善家半五郎杉浦瓢箪之助ハ残
り二騎を打て三人一度またうと落さへ土居方ノ三人玉
薬込替て大高沙う者とを刀を抜て敵のいつうとより打
つうゆい見廻す兩派打ふと後より扣へる者の小髻肩
先を餘り矢は打りすくれ各仰天して騒立也土居方ハ三
人と始め刀を真甲は指かき一騫^{ツツク}並に打てぬとい大高
沙ハ五十余人の死骸を捨傍輩のらとるる見見うへり

一 櫻 陣 戦 記

そと遙の遙なる味方より迎うる土居方ハ三人六ツの
首級とまへ清良又近習の者在候つうとてたむう川
此三人の者候討んと追廻りせりとい三人とも川よ
り北の善家櫻井ハ土居の旗本と作り置くる人数乃方へ
迎入ふりよて藪陰より廻り又清良の本旗布へを歸りて
里柵算の手なりよ伏せ隠せ一六百の鉄炮大高沙ハ五十
余人の者の往来より道二所よりハ十間十五間の間を
通して目の前より一放ををるよよくも静りて飛たり
りりいせめて能大将の下知は隠ひ々々よと後にも是
以諺より土居の物頭とも是を見て此軍ハ思ひ圖りあ
ひとまへ味方必定勝也と候ひお敵は身よ近付さふと本
丸よまさつ免らさるる土佐方の者とも此麓ハ清良の旗
本也とて採幣を振て寄来る味方ハ教へりまへ久武方ハ

一 櫻 陣 戦 記

を急ぎよの勢よのまま流くとい得我先のとせさるり其
時善家櫻井北の方より清良の旗本土佐似を勢へ打て
かゝる船までゆく鉄炮を打ちけり多てうき清良
の似を勢より打てかゝる里同士軍旗なる所は善家櫻井
清良の勢とまくり立ち山の上へ追上る清良山の上
しよ近よりて土佐方の旗本物振何あひひり多し久
武を招きさる久武是取味方と心得橋の岸北下へさ
めきつきて入る所を多し待儲たる伏足輕五間十
間の間へ待付見下多しと打せれい内をせり
額の一筋はせりひりなり一矢もそりたべき一放
りて二三人は打落せしめあゝ矢とていさすもあゝ土佐
方此大将久武内藏介をさめ國吉備前守郡輪佐川善
湯依岡和倉ると言者と先とて暫時の間は雜兵合て

千餘人目の前小打伏馬人ともいやり上は落りさるり
く死さるりおそくされの土佐勢引んと多き味方の死
人馬物具足纏ひも成て歩に得て後陣の勢は大内裏弘
おれり引退る先陣の打のこりさるり渡を失いてうき
く不へ左兵衛外記新左門右京河野菽森堀口白木鎌田
赤口中嶋松浦彼是六十餘騎一度はさるり突りり三丁
をかり押崩せ土居の旗本の陣をかくり橋の岸の額
は家の紋楓の旗押立て扣へたりかゝる所は年の程十七八斗
は若者白き帷子同鉢巻しそひたりみりれりは撫
布磨き筒引さけり土居勢の敵は崩し中をせり
て清良の旗本を目こりけてさるりと走り諸人は敵
り味方とてあやむ所は近付鉄炮を取道し岸の下
りり上る敵はうきんと清良是取てりさるり

戦記

也さうゆゑと下知しゆれり各業の中よりみ高見の
久武内藏介の内は今藤亦八郎生年十七歳也内藏介討死
せり上の命を惜むるも土居殿の法方こそ我と思つん
人ありて打と免給へと名宗土居勢の中の物の具と撰て
あまう是りとあまうため居たり土居方より鉄砲は皆
さばり押行又鎧のさうりて岸を高く打あう者あり
りしあり又八郎侍のさうりためすさうりてさうりて打土
居方ありて存藤藤兵衛の胸板を後へはつと打ぬつといぬ
いよたうと倒きて死せ其名よ土居方の法原武者木本圓
長弓を法岸を廻り三尺三寸を抜せり切とくといふ又八
の法尺は寸の打物に抜渡り合はり圓長の元來関ゆる荒
法原乃大カウれいさうりてさうりて打拂ひるさうりてさうりて又八も
着者左豆々きさうりてさうりてさうりて蜻蛉之里水車燕

花燕回右往左往互に戦ふ有さ海いづれ牛若公熊板
乃長伴は渡りあひ赤坂の宿をてけ秘所も是より過し
は目を驚かすさうりてさうりて勇き圓長法原も此小冠者切
まられ既先く見し一圓長は被官甚し郎と云者走
り寄鉄砲は火細きさうりて火ぬり取明て指させしをさうりて
といはれて又八郎は服つたは押當てたうさうりて川をわら
りりあん又赤をりあん又ハ少毛不痛して土居方は
ハ誰成を名急くやれり重眼目も不振圓長は切かする
圓長も三度と後の落は海より付さ四度目よりさうり
らん圓長仰の倒さるさうりて又ハ得たりとさうりて胸板は急かす
圓長は首切かんとて圓長も下より又ハ手切しと
取さててうさうりてさうりて大勢入こさたる跡の泥
深き水田の中一鎧武者あすのさうりて押付らるさうりて自由を

とす既より空見しし圓長は被官長助と云者鎧取
持く又八を突倒し押し首取たりと云圓長は前程より
心中は念佛し今死期と思ひ死守の山越半越く人心地
とありし少上の糧成る糧を覺る多目取つた
只今の若者ハと同たり多長助是ハ何事歟のふと某
突伏早首を取て死して圓長は引起せハ圓長死まふれと
起りた免島紙はつとほきて相とむむとさ若者より
又ハハ言葉よりとぞ知てり此處を堂内とて藤州赤
繁より中あると土佐方後陣の勢周章ふれた程味方
討よりといふと只崩れと斗と心得裏弘と支り
ハ先陣の歩残りも東の藪と指しと川端と支り土居
方よりと足輕先立て又矢軍少成とよりされとも土佐

水田の中三四所遊とるマ火繩を濡し消多し
ハ鉄炮亦事不叶しと昂時と亦多しと土佐竹太郎兵衛親則
相へする裏弘へ迎うふ善家桜井ハ藤田も大内場へ押
よせ旗を立てハ清良を川越と皆一和と寄集り
息をと休めりける處ハ土佐方より使と見して栗毛乃
馬に乗たる侍達を扇を揚其間立るをり一乗せし清
良の両陣へ中元親近年義兵を起し河讃兩國取と
伊豫と大半打取しとと宇和郡今も志川まうれそれ
は付度く手つうひめれ母土居殿御防戦強よりいま
と本意強とを元親將憤は存今度ハ是非の安否決定ん
ため久武内藏分佐竹兄弟より大将取うけしりり打向ふ
祈りて内藏介肥前先陣とて里本の城を破りて警固れ
彼所ハ籠りて佐竹信濃守同太郎兵衛後陣とて先陣は

軍兵音斗承りて待兼中其心の候一軍仕土居殿の御
手下さしは規則可罷成し存部輪新左衛門則宗を拵つ
いざれては清良一此旨に中寄給りては(とさつやう)と
伸乃りり清良方より観音寺城出して土居も内々其望
に由中せとあれは佐渡三反斗象出いり又則宗殿是は観音寺
佐渡と中者うては清良内こ弓箭又心をて一条康政より
今長曾我部元親迄三十度子餘り四十度及く相戦し(と)も
大てきまゝ小身成土居を漫罵めふあり其心地能合戦不仕
哀今度いと下こ我等癖と存罷在処又早初合戦先陣をう
禮たり大將親信肥前守就討取申中(一)定而親宗親則を深
き事有間敷と被存共併さるゝ如くて武名を恥めし(一)面
白き軍とありてを互に多破りさる鑄の錯をを落し
見申度後前(一)若き流流ゆ(一)や早引を被成軍督

時々果々敵味方と母々心駭り敷斗りて其此方致佐佐
殿へうく被申中(一)と云はせも部輪重て申中る元親
も今(一)若輩斗指越度(一)の如くは我元(一)程り世念
は被存み友今度(一)我(一)に其様と直に被中合み(一)相
内藏介と肥前(一)も討きて其被拵夜前(一)糸糸(一)の如く
う(一)仕(一)我(一)らんと尋せられは佐渡(一)若(一)も立流(一)は即時
は討と免生捕(一)の分(一)おの城の本丸(一)入置て被中(一)云を
れ(一)部輪(一)云内藏介と肥前守(一)兩人(一)土居殿の沛手(一)討
と(一)きて被中(一)とあ(一)さ(一)り(一)て(一)志(一)の(一)う(一)け(一)や(一)り(一)り(一)里(一)土(一)居
方(一)も(一)首(一)に(一)さ(一)り(一)不(一)審(一)り(一)お(一)ひ(一)は(一)色(一)も(一)又(一)ハ(一)云(一)
そ(一)の(一)り(一)よ(一)く(一)了(一)そ(一)お(一)う(一)り(一)と(一)は(一)ま(一)り(一)り(一)控(一)は(一)所(一)詮(一)其(一)問(一)答(一)
無(一)益(一)け(一)も(一)志(一)る(一)あ(一)れ(一)度(一)其(一)時(一)討(一)り(一)き(一)れ(一)の(一)味(一)方
は(一)尋(一)ら(一)る(一)へ(一)り(一)て(一)佐(一)渡(一)に(一)歸(一)里(一)ぬ(一)其(一)後(一)太(一)郎(一)兵(一)衛(一)備(一)を

豊高勢

出—土居方より里も且輕を先立荒手を入碁三度と迫合四
度目より藏人武藏混こと打てわつ里土佐方位川立番り
百をりり流備城六七度突あせりて裏弘の田中旗を
立させたり清良是れ見やり富土佐方の荒手を入碁り
るに兩人毎塩なるや—外記詰集て今一入つあてむを
有るは—土居外記其時廿三歳あきたる弓策打物功者ま
藏人の三反もりう—河に扣—る所—若藤若狭守
家氏と名乗武百騎斗真黒突てあつる外記—不断—
行流備すれあきり得手より受家氏人数を二ツに
突つけて攻戦小武藏藏人横鎧に入家氏佐川を打
崩—さるく—引とり—土佐方誦をあつて来ると
見—久武國吉討とつる事かくとぬく力落—
土佐勢周章駭引色よ見え—清良兵をすめて今日

流軍は首とる—只打捨はせ—とて熱勢百廿余
騎鎧了鉄炮立交て三町をり突崩—あひや聲を出て
押り存分責戦い愛ハ場吉の上土佐方ハ大勢あを敵
に引包まきとるゆると下知—鐘をあつて—
引まき土佐勢つ—ひ—人とりを—一所より
り終て清良を諸勢を集め岡本の麓に扣—たり土佐方
ハ是れ見てわの土居小勢をよ追—て大將久武城
討と其外國吉備前守を始て數の味方を失ひ刺—引入勢
りい—岡本の城に取籠らして我—と情あ
見捨と歸りるに二度人の面をむを—増て親信ハ元親
の所為ハ嫡子信親同前—思召當家ハ一家老也た
やく我く不殘封死するも此終る—歸—と間敷敵鬼
神成とて一あて當て勝負をせよ者た—人数を録直

關西秘傳

佐竹信濃守親宗先陣より北よせしつり其中より連鉄
葦毛ある馬より乗たる武者歩行者三人つとく鹿町斗先
立てりり来る土居の侍は鎌田次郎兵衛とて有るは是を
見て只一騎のみ出て彼武者は浮りほひ和政いりる
人そ名乗めし勝負を勢んと云ふれは是は谷庄藏と云
元親内より人決知たれ者也とて兩人乗寄りて見
へりひむと引組両馬り間はさうと落いつまいつあ
見る所は暫有て乗上り高聲ひ名乗をきけは土居の内は
鎌田次郎兵衛とて只今谷庄藏を討たりとて首を取て指
上味方の陣一を帰りたる土佐方は是を成見て一万はあまる者
とて鋒を揃へて文字を打てめぐる圓長坊左兵衛は近付
味方へけりき山陣なれは敵の的は成て射る矢はあり
者はほどりいさ地さうり一値を直して戦んと云ふと

左兵衛聞て此の坊何事とて云味方うさるは敵を見下
りて北よせしつり敵乃大軍は味方の小勢を以て平場は
勝負の何の利ありあし只軍は運は任せしとて突て兵を進め
陣を望くして待たせり敵方より鉄炮打ち射りけし
雨霰の如くあれは味方ハ小勢を備け何しけ山は陥て
爰彼所より打ちあき一人を手負なり敵の大勢群て
押寄せる所城かさよりためりあうとせし味方は
その鉄炮は射る一矢は一ツをなくして見たりちあま
この敵を打落をさすふ競ひかすまする信濃守を僻易
し唆くしそ居りり其時才れ太郎兵衛の侍は替
り信濃守の後陣は退き真吉新左衛門河野修理太夫鞭
鐙を合せつとて者として一文字を乗入透間城の
是切とくし味方の勢引つきておれし様は打て出

豊高務

備を直させし亂合より攻立せし敵是に切立し物陣
度は崩とて二所斗引退く味方の進み聲を揚
て追ひあはし進行勢の中ありて合を今橋十兵衛部
輪新左二門古山九兵衛和御五郎右門千輪彌五郎同彌六谷
五兵衛谷脇左衛門近澤武右衛門みや名衆より土居勢は終
百騎は過るより少くもや者とて度をやたさるゝと下知
よき大軍の引とせたる曲るれは踏まへし一きあつたる
く惣引たりし引たりあつたるは名を惜み義を守り
者を取りて之れ追くる敵は後へ合を引但ていさしつる
踏まへし打死し若干の兵討まりあつたりしその逃る
も里や近所けん山内左近同四郎兵衛を名乗るは十四
五人清良は見りし土居教美りあつて面も不徳討り
あつた土居左兵衛薫藏主清良の馬の先は進出さるり

推参るりと言ふ無うげて左兵衛は山内左近と引組
取て押へ首級とせし薫藏主の四郎兵衛を討取りり山内
り郎等鑑七筋鋒先と揃へ清良は突てあつる左兵衛は
阻てりあつり追まくり切伏薙伏打て廻り左兵衛の
手の者其外大勢懸合を盡くとあつた打留め清良の難救
し危かりあつる有る也此山内兩人は去ぬる天正四年は
元親陣代とせし事とて金剛丸合戦の河原をたつ
り討取りし山内記家忠り甥也家忠はあつるの
子供有るは父の敵を報ふる事も見せりしに
此兩人の甥口惜く思ひあつて一度土居は出合くと但ち
あつた報し錯太刀を打ちあつた本望を遂げんと常は念
願佛神一を祈請しつる其志通して多くの敵の中
より只二人取てり切入討死し事とて外記り甥

共不便あり勇士ありと生捕の者共の云々を云々
なりわたりたる所は北の方と見え其旗色は見えれば毎
真成北の川よりや出たりとせん小山城の表を南へ三町より
取りさうり田川の奥籠の上と云ふ所は三百余騎斗りかへ
検見して居たりと云々定信西へ川芝一類を縁の越えて
土佐似水と迫合々と関へたれは観音寺清良の傍近く
寄小聲を成て其様中より清良は元来物に不驚大将
ありは是を聞て事とも不思議く大敵と云ふ思ふ敵を不護
とりはのむ神の者本陣と云く崩と一陣破きて残黨
不全と云く何の年間に入る處を先向ふ敵は可畏様あり
追ちてやとて馬小手怒と云く鏝をめぐつてやけりも
と下知しこれ旗本は諸將各處に揃へ懸出たりてくま
は清良旗本をゆきと成てや見えよける清良を自

身手破り戦りんと云々思ふ人土居重代の太刀三尺三寸の國
俊の重しとて行平の式尺八寸の太刀をもちてしを出
りたる敵方より清良は旗本の透と云く見上げてや大の男
ぬとくたぐりて馬を乗と二騎斬つて主従三十人斗清
と目よりけ是は往昔源平兩家の戦に能登多教経と組て
海底に命哉況め安藝の太郎り末葉は今も安藝の太郎
同次郎と名乗る所へは會尺もあくおてめは清良少も
駈りて聞き合せある間へはと無入弓手毒手は敵を
請廻り切に左右に難安藝の太郎兄弟を前後に切と落し
は是は薫藏主と先とて佐々木儀之助赤口忠左衛門山
下伴賀土居三藏真吉甚内ると云一騎當千と云者ともうあ
等しく安藝り良等中は取らぬ不殘是は討めたり味
方より大内越後守清良の馬の際へ乗寄是程の勝軍はあ

ま里敵近き御旗本より殊に大将自身手紙砕く事雖も
敵御事之若流き矢もあつて給り前が勝利水成事
るれもて馬の前より進み出矢面より立ち入りて制しむ
去間元親勢東頭より追むるを我先にと落行くる土居
勢に追つきまゝにや呼つけ島取切く馳廻り汗
水成る川へ飛込く汗を洗ひぬる嗽息取續追掛
く打程より親討たとも子に不知まうくる事と見者
いたしけし思ひく心より跡も不見して逃行中
何者とは志れを我者三騎主従廿人より乗さうり踏
まり退くる敵軍防ゆる十余町斗乃間は居者皆
色三騎斗成り土居方より水邊治部善家八十郎
中兵十助退付彼志きもの也いある者名を名の
と呼りうるに三騎乗るに近澤内記熊澤三郎兵衛高

岡嘉兵衛と名乗取て逃りさうり打合戦ひくるは
つ々味方あり土居方より追り馳乗り彼三騎の者を
不殘そとあつ討取たり其後追り名乗る者一人
もあつ廿余町より追討りる所逃行敵ありさ
るに成りより澤田公義中野通正の侍に逢ひ跡より
城取出で逃來る清良兵より知りてかく逃るるに
さよ水邊より追取るに彼等より敵の首をとりて皆
島つき休めり少小高き馬に乗上見物して居る
りある中野澤田の者も清良追ちたる敵の捨たる
兵具とも我ら者とわらひとてそとてあつ初めぬ
者とも追廻りる敵の目もくみそ奪合押合是と
とらるるものさうりあつと一夜とて安ひたり
左兵衛中兵衛は是を見物して笑はるるに彼等

熊澤三郎兵衛高

を制し打捨ち首ともを集めるとして雑兵の中
に押しとめて是を拂ふ其後深田中野藤本共者も土
居方よりちりこみたる首を集めさせ生捕の者も見せて
名字叙記ししるふ先大将久武内藏介親信佐竹信濃守
親宗同太郎兵衛親則其外國吉備前守山内左近同四郎
兵衛安藝太郎兄才大高沙新藏人谷庄藏同甚介同次郎
兵衛兼名甚左衛門同弟次郎左衛門山内式部稻吉新兵
衛同新介香川八藏近澤能津高岡部権佐川久礼海部
十兵衛是等も宗従の侍として甲首八百七十五雑兵
千七百三十七此外若藤八兵衛山本次郎吉山河左吉吉良
小十郎姪倉席之助安居三十郎久武辰之介同千吉らと
河先として生捕の者六十八人首数合貳千六百八十乃

首録以て甲の中刻し勝鬨旗執行極能佐々木虎村大
窪土居江雪など立出旗指物押立武士二行を列せ引
大内越法螺貝を吹て式正の勝鬨也土居方より河野
市十郎同大膳伴藤藤兵衛土居似水是は清良の伯父之間
の城代討死し櫻井武藏河野修理同山城守大窪勘解由
有合之助もとを始て雑兵追ふ所余人は手負有 藏主ハ
大層脱し成衣を腰に纏ふる斗りて終日衝刺敵に大力
を組合多く其人と打合りてをりもを不負し
不思義なる事也土居此橋合戦として近國筑紫に云ふ
不及都追もわくをぬく閑へたる此時の軍也土居
方一人を敵十四人あての軍威しを如此勝たりし前
代末関の手柄也其後道後より飛札有其状を曰
今度土州より岡本之城取之處自身被手碎る故

關原

長宗我部隨身者不殘討果刺要害被取返し隨
戰功無比類事火而幸勞は様科重賞を中め仍太刀
一振金覆輪鞍馬代進い馬と謹言

六月三日

通直判

土居式部大輔殿

右の祝儀の音物有相應と返答して此よりささる

縁越合戦付 土居似水討死の事共薰藏主悪口

之事

去程は大手乃軍を帯とりては櫛手のまりの趣に芝四
郎左衛門同一角案内者めて土佐方より吾川次兵衛東条
久野右衛門仁字丹波守彼是五百余騎入替く攻戦ふ此
手に土居似水大將めて玉木源藏安置藤藏ると紙先と
せしむる十余騎切而は支へ防きしうに土佐方多く人討

きて谷川の流東へあつたり土居似水兵をすきて追詰
く討つる安置藤藏ハ東条久野左衛門を討取それより東条
ク者取とりしにせしむる谷相もく敵味方入亂を火出る程に
て接合するかく軍急めを大將似水甲を脱採幣取と
急廻りく下知しる所は川くともあつて細矢一筋似
水は眉間をまて抜たぬ者ハ馬を真倒し落たりたり旗本の
者走寄こいり大將手を肩めよと周章細く安置藤藏
懸寄と是はくしるしを騒くし先敵は崩せしめて似
水り持し採幣を取てゆてうきハ敵ハ跡取と見せ西の川
國遠一二方ふて引退く土佐方討取事雜兵合百四十
六の首條も勝鬨をせあるり清良ハ大内村と
岡本の引入勢の番廻しと土居居たる所へ源田公義中野
通正有馬兵庫頭もをせし来りせしハ薰藏主ハ戦草外

眠居たり終日合戦植田の中より泥まじりたるた
り敵のまゝ討とり五鉢朱も成と衣と腰も纏ひカ斗指
て居たり目成摺て打つて云々旁歴の武將と
してよくおろきさせぬ物代々大敵似土居殿一人
のわておろきさせぬ物代々大敵似土居殿一人
くし御敷けおろき跡の祭も只今も成と出有る事
我は法師の身もて之見放つて今迄も土居殿有る事
らせて似合ぬ僧の腕もてあつてよくおろき罪をほく人
殺しておろきあつて方便の考智恵の矢味方のさめおろき
却て慈悲功德も成へくおろきと大聲もて以の外も恥しめ
あつて三人の流目も成て物をいふも其時有間能奥の
侍も清家兵右衛門と云へば薫藏主も小僧の時より頭も
と打ちおろきあつてよくおろき者もさへすも出く推集成

小僧口の明も何事をやとあつて小威しける
時薫藏主のびつり清家をさつと瞻て和男何ぞ云々
其程終一里にたぬ道も終日合戦敵味方責戦天地
と響く斗哆叫ひて迫合時りのあつて大敵も思
と慄戦りて居る清良も敵を崩さ味方勝ちと見て
漸くよろめき出ると来ると武士も武士も和殿敵を打
小僧も酒宴も座敷もとめて口もさけりて
大場の合戦も其いさりの出間敷侍の業も太刀を振鏡
御実社専らさなりなき敵の上手何の用も立へきと
敵も悪口もせぬ清家も急ぐ刀の柄も手をあげ薫藏
主も打てからんとも薫藏主も今日も軍も敵あつて討つ
る血刀も抜き清家もいさつとあつて諸人押阻りさへ
善家八十郎櫻井五左衛門玉木八郎堀口辻之助も薫藏

善家八十郎櫻井五左衛門玉木八郎堀口辻之助も薫藏

主とらとらよ抜つきていつは兵右衛門歴々の御前あるま
理を以て云者の返答は後より刀むりめりて事は何事と
其いさあひ紙先刻出の敵の一人を討てて侍の本意を
有へ法師僧と相手ありて義勢とてい孫見苦くおそ
此者なり前より左様乃振廻あつて其座はつて中問敷
とて既々事出来らんとす紙兵右衛門傍輩沢辻孫左衛
門宮内右衛門藤右衛門中野安岡熊之助と分入る扱ひ
土居左兵衛同藏人立合中より入るなりされは薫藏
主服に居りて汝金山流の内より口斗き見物の座敷
ありて候いきりなきともいつて手柄したる事とい
まきりて座頭坊主との頭張をうりて其腕はさつた
候とて思ふさゆふ云言はるは兵右衛門怒り指出薫藏を
と迫籠りて薫藏をひ振りて居るなりと笑止るありとぬ

諸人目引鼻引扱を薫藏まは衆味能事云とてさつて
咲を合むもの多うりあり清良笑て薫藏まは今日の働
手柄の次を三人の物語して褒美有るは兵右衛門
耳痛く面目れくを見えざるは五月四日此も
ゆたうせりて一日は終日戦ひ着て上下は皆瘡とて
てなきは北山と扱つて荒手の敵押うけるをいつての
と諸卒是取らやとて思ひ備候之陣を望くせん
といは清良聞て傍れ衆つてい並余儀さうありて北山
乃勢とを後より推れ一旦と前へ進む事あるをた
とく若責来ると此競を以て有間中野源田流の荒手
働有へりて土居勢手柄かろは程の事いひまきと
云らちの家藤監物奈良攝津守同権を進ると馳着とて
い今い孫衆つていひるは搦手はく似水の勢勝開を揚た

豊高勢

りしに遂以前の事ありし今も花角の左右をさ心え
るしとて使番取つたりたり是をいふしとて選りし
りる攝津守監物打つて縁の越来こして見ると此手あ
土居勢ハ敵討ちし一不子集り大將似水深手はく
取ら外痛くさし各軒取滴し今も限重と看病しとそ
居りる清良是残聞て馳行似水の手取取いりあしはさ
似水息の下より今いりあしと覺りて也相軍いりし給ふ
取と向りる時清良両心安りて敵四千余騎及打向く
を源田中野有間より一騎も助来しと清良一手も敵
の大將三人を始彼是二千六百余討取其外は追つし味方
もさつれと共と中世のさつれは軍も元親よりと塩張
付ししとゆりつけは打退取しと引終りしとるる成
こたり此人りしとより文武たしと兼備り諸人も重く思ひ

しは運の極めや云るさ流矢子當り矢たるは是れも及
りぬ事うるも清良を泪取るし諸人なる程の袖をぬじ
おしあをりて方へき事あるし死骸をりせ各
帰城あり也

薰藏主り事

昨日廿三夜待り薰藏主り大森の城は多々か彼を能
事時の因慶和尚の才子より軍の陣へ出る身はあ
らさるし土居流は合戦の事也とゆゆはるさし雖
や相撲ると見物あること思ひ清良打立りるは
し重坊主頭お振るあつた橋を弄りし雲霞のさ
ある敵を見やり味方なる者様也さしは迎てりし頃
清良の傍近くよりき寄て鎧の袖は取付敵の方へ
指せさし舌をふるひしは敵をかくし海あま敵の

農務

事ハ近國まで名譽は万箭取也と沙汰付りかく大勢の
敵はむくくと殺さるる船りん事本意なりうはれも引を
時よりよき何と思ふ一の敵のしきりひや一豆を早
く迎うへとせ給へあまは取めりまゆまはし何とく先へも
叶ふはしきくと引くべきに清良あつて思ひよりふの
挨拶もさき思ひ居りまはし薫藏主へく思ひよりふの
へる盛きやうをぬくまはし居行ては度り有るこころ
かゝる思ふべきやうなく清良成むことすめ是れよとも
共今更先へきやうなく清良己まはしこころを思へ共
左兵衛の思ふらん所和うへくまはしはゆらまはし左兵
衛に申せとあまはし坊主嬉しく思ひ左兵衛に向ひ言け
るに相と各大事此殿をわの大勢此敵よりこませ殺さ

せんとおもはるるややく供申て歸りまはし惜はこまはし
事よりそふきとてとを付を後へ左兵衛もかうし思ひ
暫くもつとまはしりりり余りやうまはしこころをより
ねる鉄炮の臺尻まで志くく突のけ爰なる小僧め
ハ何し爰ハ来りるそとまん何らまはし又清良の前へか
さては無分別ある大將うなかる人をいつまはし余りまは
護るるそや月待日待祈念祈禱を殿の武運長久延命と
うそ祈るる眼前命のすゝ事成志くまはし愚ある事や
あふらまはしとくまはしと聲をふらつせ齒をあらけて
爰るる筒井か竹や土居左吉あつて花もほらるる兒あつて
むらとと敵の手よりあて殺させん事いとわらうかまは
わらわれまはしとらうとわらう内は身は敵近付兩陣
たうひよ相挑ハ薫藏主今ハ無為方成と魂取居之今と

書
機

書
機

いひり口を違甲斐く教諸膚脱し成衣取て腰を纏ひ
誰に乞求何方を拾ひん刀取て横を引く尻引く
けて清良の馬の口取つさし小勇に進と出敵りれいけ
出お拂ひ切伏目のまへより敵を七人討取らるる薫藏まは
天魔の入替りたるうと清良は始め旗本の諸將を被
さへく働くそ坊主法師は芳らんとやと我人とも彼を
手本として一きい情を出し働く只熊野三所の権
現清良を加護有て薫藏と変方尔現して運の添ふらん
とゆやしきこそ武篇をり清良の勢の中歩行者の内は
此法師ははくくはれく清良の馬の跡を離れく大将
成大事よりけ迎る敵は目をもけを懸る敵は斗は渡り
わし大将の手取あらを己き一人のけまら敵を討
く清良を見と首取ては披露し向ふ所一足も不廻

危を救ひゆ戦やふる事世は類働也大将勇をきし士卒是
よとくし係る僧法師原と手柄取頭は事是併清良は高
名也彼は大窪勘解由り甥古屋宗林り孫鬼に助とい後弟
まで俗性を悪くを皆武勇は筋目也是よ望能壽寺園慶
和尚へ清良所望有て元俗ととせ山本豊後り養子として
跡目就継せ則豊後とそ中り其後ハ猶物則て無類の手
柄度く高名多りり利

土居藏人利口之事

翌廿五日早天又西園寺殿後詰りて出陣ゆりうとも
かく静里たるよとく妙覺寺はほしく諸將召集免先清
良の大功を感し賞美をよと重代の長光の太刀同刀馬二
及其上此合戦場堂々内ハ河野通正の領地成し紙召わけ
あて土居へ加増し結るあ時の面目世のきたる武真よ

叶する事也。扱土居の家中侍分へ、對面可有とて公廣
卿孟城給里其介被官を盡く召出く山田久枝兩執事酒を
めめ褒養有扱公廣々の事ゆり岡本の引入嶽めり
て可也七哉是也とて清良の事ひたす。中野通正某は
新仰付新下坂へと申する時深田有馬奈
良各望申す。此者とも昨日より里水の手取苗並其上
有て清良され。此者とも昨日より里水の手取苗並其上
玉藥拂底はして鎧長刀太刀迄打換さして。是を討
事ハさのり手間を入出り。夜前も次と存す。其
彼等ハいせとて可然存其終差置申す。つき同く
たせけられて。いり。あんと申す。山田久枝を
也とて申する通正重て彼ハ一人とても究竟の者ハ殊
子虎之介ハ其名きこへたる武士のせハ助あり。養虎の慈

歴然たる。と申する清良され。いせとて彼等ハ剛の者
とて。いせ又勝病者とも。軍ハ勢の多少とて。士卒の
剛膽ハ。いせ。其只將の謀ハ。是等と討き。又彼ハ
一類恨深く。重て。戦ハ別して。騒く。勵む。敵思ひ詰て
戦ふ時ハ。味方危く。敵恐まて。か。ふ時ハ。味方一騎當千の競
の里黄石公ハ。三略も。是と專ま。と見。て。同く。敵を不
討して。敵國の志。つ。謀。を。わ。り。き。事。を。弱。き。敵
と。た。と。一旦。味方。を。討。も。か。さ。ひ。は。返。さ。し。ま。物。と
不。馬。強。敵。ハ。味方。一人。も。う。こ。せ。れ。や。と。も。諸。卒。是。を。恐
る。ハ。常。の。事。也。彼。亦。と。今。討。ハ。い。と。ゆ。と。く。騒。き。や。う。と。弱。し
た。を。あ。て。こ。う。ハ。弱。き。を。う。ま。を。強。く。敵。の。思。ひ。入。覺。別。よ
て。是。則。敵。の。機。を。奪。ふ。の。謀。之。教。して。其。恨。致。請。と。助。と。其
為。は。思。ふ。と。大成。遠。何。然。と。母。生。死。の。事。も。時。宜。よ。る。ハ。

讀 誦 雜 編

讀 誦 雜 編

昨日の軍は味方利るべく被等壺人成とも討く味方は以
らそとせへはせを存ふは勝誇るる軍をせ今被等紙助も
かへさるるは初と味方彌強き所有る敵其威は恐るるん
と理をせめて申せは公廣卿さへは例の土居藏人同左兵
衛徳能金剛櫻井武藏とてとてめさるるは櫻井は昨日の
軍は手負もして不出残三人罷出る其時公廣人ては向く
此事旁は如何思ふそと回きさるるは藏人中らるるは清良の
手柄の中たるる様はさへも昨日の軍は如何の城主其
間を近くもへと母いり、思ひてり何れも不出合土居一
人して四千騎及びの敵紙討掃其上侍大将程好者共盡く
討とめ虜く生捕り多く仕莫大乃手柄仕て出へとて逃帰
りぬ敵は此様子を不存味方大軍にて諸方此城主集り
公廣のよりも後語有しゆへり軍も負るるやうも申

彼者とも紙助てうへつりさるるは味方の極子紙を委語
軍中第一は是に敵其を攻めいよく弱き付攻めし中へ元
親四國の内三ヶ國取とるへ今當國一つの望有重て打
本よりん時日介橋合戦乃時土居一手さるるは味方の大
軍と打拂ひ諸將紙討取たり増え西園寺殿出馬有諸
將不残打出て戦ふは程の人数紙以て責るるも不
可計とまづつしして不戦以前ありあやみと思きてめらひ
敵何十万騎有といふは何斗の事と仕出さる間敷はは不
戦先は味方は勝有扱又城の内へてを可然者ありしを
ら紙人質と残り置残る者ありへてせと被等紙討きん太刀
まで芝一類紙お治ては打果北の川鼻成を取つてさる
可然者りん被は去年伯父の如き仕て元親は随ひ當春
元親の親の字紙もし親安と名宗元親へ人質と爲し

北乃川と領之と敵其入質格うう其上地の利は付く
城取らうとせん又手間城とくわんにおぬる今度の生
捕の中は能者の子をあやうくおぬる彼を是と取らうと
浦本領を一統に合させ給へうとやをさし公廣は始め
多田南方山田久枝乃人くと尤主極也と多岡本の土佐者に
をけらうとせん定りぬれ清良は手指引のせとせはるる

浦戸其外生捕之者被助土剌へ帰事

かくて清良は真吉甚内栗原伴賀右衛門兩人坂岡本へつり
わいて大将三人討つ上各の命は是を申候間急き本國
へうとせんといふと西園寺殿教仰と申せは虎之助返事よ
相毛昨日土居殿高多相免角言句ははくうき御共
警入候去内藏介信濃は慥に近中と見及ては原軍と
いの中り候事候は探り候とてはくわく層ははあま上

まうく敷道具は無御座候へは是より腹を可仕候とそ
申り白清良重く内藏介信濃兄弟のまうると御覽候は
僻目候敷は土剌一統歸候り首は此方より上は理非を
不論早々歸り候と追多元親此表一打向り候時又
此越候とく佐竹久武と始め其外大将分の首十七八
見候とくは虎之助是を見て受果聲候揚く泣きれ
は當座の面々各袖候とく是より急あり候とて虎
助中より此上の彌是より切腹可仕と申せ共兩人より
異見候とく虎之助子虎藏姫倉米女伴与才藏三人留置と六
十余人は真吉栗原萩森と警固候と深山を送る候と
りる追付中村の城主吉良左京進と里使有て怒り返候と
と云越候

芝作列傳を鰐口と題する事

同廿六日諸勢馳集り而兵庫頭同左馬頭其外軍勢の手
分一西ノ川四郎右衛門ウ鳥屋の森定信一角塔の森河原
淵源三郎ウ河後の森左京進ウ竹尾森此四ツの城ヲ取
詰ウリ芝化別元来名譽の者ウク即時又頭を刺長樂寺建
法寺の兩僧弑打つて西園寺殿一罷出某全く逆心無而座
者一とも土佐堺子居城仕元親大勢ヲて押寄りつて早速
攻落させ若き子ヲの亡し多ク事我親の才ウて不便
ニ存無甲斐降人ニ強敵ウテ之ウク只今ケ様又御人數ニ
指向らば之ハ猶以難逃彼某逆心ウテ弓矢引申様ニ我
思召彼所而七千万ニ併只今申上後通子ヲ不便さの餘
り恥致ス至今ニ誠ニ以テ面目次身有き事ニ奉存彼此己
後後詰々一茲推下其ウ元親何程大軍ヲ以向ひ其兵
此度身ハなきとのと存めて忠節粉骨ヲ成ク可申彼能

く御推量もて御覽をせしめ土居清良との様ニ存
く手柄を何ウハ一敵を思は被官有も歴々武篇此者多ク
一騎當千此士卒我持めて社手もきく心も働きや某
芝事ハ君の御恩我以て近年人と成くるべく敷下僕即
等も持不申殊ニ敵元親三ヶ國ニ威を奮ひ當國の内もウ
のウク志ウク申せ處土州乃堺子罷在私あるハテ其ウ
土別一人質を出さす彼又攻て不きをウテウク申道
を降参し解多ク在之後ハ御當家を大切ニ奉存ゆへニ
かく只今迄も無恙存事子其志を能く御思慮あはせ
某子有御助あるを人質等の様ハ何程を指上可申と
辨舌を以て一死を理よひひる涙致すウテウク
泣々々公廣々を例の許一をれハ元来彼内縁を以
てウク取入置其上近習外様子常ニ大分賄致返は

豊後守
備前守
備後守
備前守
備後守

撫卧置る故人く尤と取成るるより西園寺殿又此言
葉又落され實り中思く此以前妻女と人質を取て
其時の科と指ゆるを又老女痛の教孫子の見参のため
少の間りつり何とて其儘押留置る其人質と久し
申さる里し此条別て謂る如く有るまは芝謹く其段内
尤只今ちんまの処に何とて彼を不便と申思召子を見参
とて少の御暇に下を御知を風知付るべく養生仕度内某
孤謀叛人とゆは有て系一類共は通路不罷成りしは
と存出御北ノ川通安奠成兼能ハ土佐方は攻落を某
手こくもあき若き者も心ある元親よりま川り
あき申あ思召も居るに之をきくても君後詰り遊
新下りく何しと面目ある元親御主と頼可申哉
某微弱して大敵の堺目も在城仕毎度敵は取田と無

為方敵はも里取致さるし申事二枚あはき願くは只
今の領知を召上可然武士を居をかき某は只今乃三
々一もても郡中も御杖持あはハ一入忠節をたかく
芝ハ名譽の武士也と人も讃らき君も疑なく以安
堵有へきおと向くしやうも申せしは偽るき
段面く一人も七枚充の起請文はくし先今度あ
御免何とて城くの田致解き美作を始め子及
彼是五人の者三拾五枚の誓紙を調各人質致出して
鞆の口をせ道き多しりきも寄手此事を例て口惜く
思ひ西園寺殿より直の御判到来せしんて此陣引
間敷とて混くと押詰りつきの埒を堀一重は焼つめ在る
ハ一字も不殘放火し家財雜具を奪取中く毎に毎甲斐
有さるありといと美作の辨舌より終り元のとく

農務

領知しつゝ又元親一其旨と云つて一一金銀を取らせ
樂くとも暮しける其頃人々沙汰しつゝ兵法と云ハ
此事也作別の古狸めり只と討まふと汗水あり黒瀬
殿一頭を剃てさせ降参し汗を泪に催し合はる公廣を
討しつゝ相重く賜ふし芝をるると少くぬ者あり
りつゝ何者うあつる古き板押し割く

よ乃武士の鎧長刀のふりしり
やけき芝う舌はさきりる

や書てそ立ちりる清良ハ今度橋合戦の辛勞分とて
芝刈攻らるる人数ハと殺たりたと催されたりと
前々の為解あまハ又此處と埒明きつゝ催はる
黒瀬殿よりめりし一方向は誼なき不きとて如此の
事重疊の仕合と悦りつゝ岡本の城を普請せん

百姓田草を仕廻りまハ人夫を入取繕ひ成就を於て真吉
新左衛門は預け立間石城土居似水の跡ハ土居外記重
友を城代に居置たり

西園寺殿北の川を攻らるる評定之事

同七月十七日西園寺家ハ武士欲集りて美成北の川を攻
らるる評義有彼ハ城の要害より其上土佐より加番
の者有あまハ有能く出たり有て可然と一月ハヤハ
公廣ハ立腹有て去年北ハ川對馬守通安を元親責し時
被表ハ地の利能その上通安被官共元親ハ内通してあ
切を間敷所攻りて各後詰進なきは通安ハ腹を
切を我此事骨髄口惜思ハ胸中不安今親安ハ通安ハ甥を
よ心務りして元親ハあハ河野より相續して代
乃通安字紙持て元親の親を名のり美成弟能ハ親能ハ成

と我より引侍軍は見懲然た免ふ彼等我誅とて元地
有間敷せれうはうへと各我頼むよ力かゝり所詮我手廻
りの者斗うて押寄是非の一戦して憤を散さく一糸
康政長曾我部元親夜くまあおる出向ふといへる土
居式部大輔清良勸修寺兵庫頭父子とて毎存多くの
敵を七月一侍大将を討毎十倍廿倍の敵を追う一豊後
勢の雲霞のくく幾度う攻来れ共法花津勸修寺土居
此三人社手痛合戦して皆公慶の威を奮うると四方子名有
徳能金閨土居藏人思ひ寄らなまら心危候多残中せと有
ちとある人の鷹の列座るうまふ川て謀て頭を墨に
つけて居たり西園寺殿重てのり清良は今度候て不
被出其代とて希ある土居と徳能何の憚らある一まら
と作らまら金閨廟取直し即誑のくく作例一黨姑め親安

親能亦不忠不義の所言語を絶て多作去君の御威を以て
去五月の清良一身の働きて内藏介其外多くの元親勢を
打果し時日を不移芝一黨我攻とくうらま今奥成北の
川地の利我得其上加番在之とて何程の事うまへ清
良内へ申すと三間の武士と半分河原關三口の押へま
半分大宿より奥成へ持向らまらとて多良谷と本陣
の西へ宇和中の武士は北の川へ押懸り城を渡りて攻落
しとて在る所の作をあら一氏家我焼拂ひ時分
くま三層程焼落せり城をこのまを落し一但奥成
北の川の土佐一人質をまらとて其人質するうと
くて城攻持つち事わら芝弄化う人質取返せしと破
元親方の内証我時を去る五月の生捕せと親安親能う人
質と取らうとて可然とせし西園寺殿方と悦ひ合点

豊後

有て其まゝに人数配り有先口より押寄せ在る放火一作
毛を卧捨陣を引きたり

重て北ノ川陣之事

同九月始、清良大将として三間板嶋の武士ハ二年分り
一手ハ土佐口を押へ一手ハ奥成龜森を攻守和中ハ武士
ハ北ノ川一押寄を又在る放火ハ稲刈刈取より親安親能
雅儀ノ及降系をひりり我菟角今度責為するべきと有
り清良申りりハ彼等元來當家の者あるに降参仕らハ
其分よりとて可然か去ハ九月子元親大原より其上
此頃ハ信長と不和子成三好を取合始りりゆり後詰も
ありこれハ下を兵ハ降参申なきと云り我諸人競
ひりり其費ハ高きを弓矢ハ取たるとのありとて攻
りきハ西園寺母ハ彼等ハ懸ひり棄て十日斗責られり

かゝるりり我ハ豊後より又大勢浦へ一押寄を稲刈刈
りりり所ハ早馬城よりとて注進ハ公鷹を先と
して先此軍を留て取物を取不敵帰陣をりりりり親
安親能今度ハ運致りり危き所を道にりり

豊後大友義秋勢糧籍之事

同九月十六日豊後より梶谷坂本臼杵戸次之武士とて数
百艘押渡り浦へ上り稲刈刈守和中ハ乱入板嶋津嶋籍
して三間へも打入んとりり各出合防きりり取
りりり引拂ひりり近年ハ豊後より里方便我替り永陣を
す両作の時分ハ我考一思ハ後刈取船を積てそ之をりり
結句永陣よりと國の雜儀軍ハありて透間くハ作毛と
られりりり民の苦りりり為方浦湊の手為りり
用意して是我防人と適り四艘を船我持置ぬきハ大勢

豊後

渡して打破す又ハ能船我奪取して帰る間結句敵のハあや成
く夢て味方の用はたつたわくも思はる事也

魚成北ノ川我取返す事

去程ハ元親近年ハ將軍信長へ取入て四國此事を手柄を以て
治一きとの朱印有とていしそゆりかの元親龍の水我得た
る心地をと聞ししハ三好笑岸様と諺し其上西園寺教
と將軍ハふつき首尾有て別との間あるハ元親ハ末く頼
有武士ありぬ事と委細と申さるるありや弟のそくハ
るく約束を引違へらき三好と元親と取合初め阿讃兩國
の武士ハ一と一と甘一と見合る中まて三好ハ志深
ま元親我習て弓我引芝義作是と閉て今ハ又元親我毎
心元思ひ西園寺教一ハ忠節振とて父子五人廿日誓
せよ黒瀬の城下ハ屋敷を申請て之詰りあり相西園寺教

の事取すま其外出頭人ハ懇切と取入公廣の心我を
かりけるハ武士の本意ハわくぬと覚ハすきてい
り成仇敵鬼神とて之芝ハ一言と出合てハ靡りすと云事
なき名譽の者也是ハ依り魚成北ノ川を元親我今ハ背度
心ありぬと其子ハ兄弟取人質と出置るるあり其
等我捨うてて菟角衆ハ煩と芝一角元親方一行て種
々の計策を以て土佐方の生捕十一人の者我りし
北の川魚成の人質六人我取之今ハ河原測定信西ノ川
魚成北ノ川ハ西園寺家と立歸り是偏り土
居清良の一戦の大功有と云りしハ里此時公廣より
前々の悪逆の科我とめきて五人ハ所替をさせし
ハ或ハ本領我割て愷成領主我指置るハ又ハ人質我重
と取置るハ可然事あり度くの事も懨かりしはさて

豊前

彼等色くは媚諂追従しつるを實とわらず公廣々の心行
未とても頼を〜〜を心ある輩ハ歎きたり又元親暮
里出るハ彼ハ手紙裏紙返を〜一夜の内ハ土佐方へ
あり〜引〜事疑あり〜つ〜者多り〜何
者の所為もや黒瀬教惣門の弟子礼を多〜

提婆之惡觀音慈悲 樂特愚癡文珠智慧

美作惡西園寺慈悲 公廣愚癡元親智慧

行ととり足らずさいとふ道芝く

朽くたの〜なき露の世中

何〜事と書付けきとも西園寺教心つらせぬ〜只
芝一黨の追従我信〜かり〜ま〜公廣の兩行未覺東〜
やいひわ〜里清良と黒瀬の城高〜〜と〜芝一黨の
そ〜と堀の〜終りの崩き〜と〜悔り

清良記卷第二十四目錄

一堂々内小七手柄付同人寂後清良下知之事

一安並藤藏黒瀬殿削制札事其直行与公廣郷確執盪觸
之事

一從守和方郡内へ取懸ル事

一毛利輝元与公廣郷手切隆景清良以分別和睦之事

一輝元家兩川より清良へ使者之事

一西園寺殿領鎌田三河守切腹之事

豊
高
務

清良記卷第二十四

堂ヶ内小七手柄付同人最後清良下知之事

天正十年正月三日堂ヶ内村の百姓等以上七人同形之城
代真吉新左衛門尉百つを清良一目見一しつり清良對面
ありて神妙よくくそ出仕一たり何も一酒をすめよ
とて奥へ入きし時彼百姓等真吉一中々々我く數代の
主河野通正弓箭の事毎余義ろろ友と以て西園寺殿より
堂ヶ内村と移る上今ふ高き御當家の領民と移成て其處
今日御目見仕夥々懸御初難有仕合ニ奉存候就夫て
御當家の百姓亦並の御奉公仕度存留以後御戮御し御
供仕御幕串成とも持鯨波の声れ數も移成存留之間他
並に道具と被下置候様又御をうい奉頼みと中ニ付其
旨清良一中々れハ奇特成奴原也さうい器量の者と撰

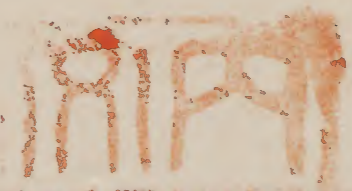
西園寺殿御難日三百廿四日
一 御當家の領民と移成て其處
一 御當家の領民と移成て其處
一 御當家の領民と移成て其處
一 御當家の領民と移成て其處
一 御當家の領民と移成て其處
一 御當家の領民と移成て其處
一 御當家の領民と移成て其處
一 御當家の領民と移成て其處
一 御當家の領民と移成て其處
一 御當家の領民と移成て其處

豊後

豊後

出せと有る十六人有る残大小の刀に鉄砲一換つゝ、深て
顔けりし一々各懐てしを振りりる同正月六日は深田
公義中野通正同人の聲西に川芝四郎右衛門相伴ひ鷹野
子出りたり堂ケ内の百姓小七柴蒞り山へ上りたり小
七は犬を追出り麥田へ下りしと鷹野は者とも小七は
犬を追つて其免を鷹犬は追せけり山際まで喰伏
し然るは小七は犬を見えて口惜くや思ひあん横切て
くけ行鷹犬をやりよるゆめくいりし〜田の中へ喰伏せ
泥まふしよる 菘を引くは〜小七は家へ歸りりふ若
黨は追つて免を取のこあはるは犬の足も切て捨りり小七
は赤子に吉とて十二歳は成るる走里出て人の犬を取る
菘を取其上に犬を切事奇恠成とぞめくれは者共立歸り
て爰を畔めりこさく〜き奴我とぞ踏倒して歸り行所なき

ち起つてめとひと〜持くるを海弓は小矢打つて
引たる兵と放し若黨の尻は少斗立ちりり考と
又取つて〜の吉を泥深き溝の中へ蹴こさん〜は踏
りれは吉も半死半生まで泣けるは小七は父七十はあま
〜る菘ありし目の前まで取りし風をあてしと思ふ孫を
くくは〜しれあ〜思ひ竹張の弓はさけける
年失を取添ふるはし出て追行あるも行歩も叶りさふ
老人あるは立とゆは犬音残あけて者共く〜せ東西も弁さ
る雅子は何よりつて〜せ〜はとく犬畜生成ともぬ
て我は意趣をい〜とよ〜り〜も耳も聞きしは跡を
も見に〜〜なれば老人怖兼いり中野の腰拔共侍りし
日頃遊覧〜は我は百姓あるは〜せ〜今ハ土居御願
の下あるは昨日遠は母等主持馬の草切つて〜心の春遊能志



たりたり度せ手あるは是をんそ躍揚りく齒嚙とくく鷹
 狩の者共是を聞悪き雑言を中若く子誠は昨日といふ當家の土
 民あり今他領の者と成く日來のようそを志は我より悪口
 其の曲者也その年高の踏籠をよと若者十四五人取て之
 を翁得とうやと指取引浩射多れとも腰撃肩さうつて弓
 勢弱く其矢立やとくはやるれは大勢取り是も又孫々
 しく踏伏くま片息ありて居るるり小七をい後ま
 ちまうに柴を肩荷を歸りたる此有様を見て驚き毒子回
 へいさうくはう一語りりり小七聞て是程の事なると後さう
 りも我よりさうそさうそ内は母舅は孝者と見たりよその
 親るぬい今あそ其心根くさうといふりり妻答へる
 いされいあそ此大事我呼言えまうせあは大勢をいいうま
 お月をととも叶あまういりもも逼塞して後日の仕えしを

了そと思ひてさうそまうそさうしそ小七聞て去年
 六月より土居殿の御領とるり我等の侍輩百姓流ハ歴々の
 侍流も不考高名の働度有其上土居家より孝をえつ
 て忠我さうさうさうれい正しき親をうさうさう後日我
 侍間追放ありあへき事疑あり此儘有る人といひし
 増て況や昔以前我より人数は撰ひ出され刀銃炮を種々
 ち一孫ひい何の為そやとて嫡子甚助廿四歳次男甚八
 廿二三男小助十八父子四人竹張の弓或ハ銃炮金鑄力と
 引そめめて通正公義四郎右衛門が大内首塚より并當
 つうめて居るる所一河を隔て菟陰より恐ひ寄弓銃炮一
 矢射くゆと云程了をあを抜つて切て懸まは武百余
 人の者共小七父子四人は切さるれ倒れぬらひて近散多
 くい已れらう弓をて麻を蓋り這くの為解浅まうりし

豊高

有様也小七父子追うけ追詰渡し合て散く小攻戦ひ四方
より追のけ子共を集めたる小甚助ハ深き處で倒さふ
是今ハ叶ひしとて甚助ハ首打落し残る子共を呼よせ難
人ハ目立ちけそ大將を心うけよとて真一文字より形勢
面をひくつさやうとるまゝあつれども敵ハ大勢を中戦
隔て大將は近自得るもとて寄者父子三人して十六人
切てふを四十余人ハ手を原を命をあつた勤しうはさす
うの小七父子も大勢と接合戦ひ勇氣癒さ力落て小助ハ
生捕せしむを残る武人ハ討まよたり岡本の城代真吉新
左衛門此事致聞付混甲三拾余人足輕を先立て打出しれ
ハ鷹狩の面ハ己ハ城々へそ引入る真吉高森へ押
寄在る城下民家を焼拂城を攻へ急後詰の勢を指回
るまよと大森へ告ぐれハ右京五左衛門八十郎平余騎取

物も取あへし馳着り跡より清良ハいつハハけるハ近
所の事あるハ少斗の儀ハ堪忍とて率命は攻うをすとも
子細をよく聞届て此事あせよ左兵衛も急とて各追く
打出けり物真より松浦内藏進を以て此様子委細は清良
へ申すれハ江雪金閤各命あして小七ハ振舞天晴無類成
働也通正以下三人の衆のわくまも又無類也うく分明なる
勝者ハ真吉今責うけてあつた小七ハ手柄も吾も成之
つゝ土居方ハ越度とるま一ハ百姓つきの事を主人より取
何を其仕うハ一をあつたんとはいふれんおとけあしとて
其儘置て生捕の小助を取らば是才覺可然と有ハハハ老
功の考とも是ハ手ハ分成両思案至極とて又藏人
六衛右と馳加り其様を諒ハ才覺ハ生捕の小助を取ら
し事由ハなく済しかり是を聞人尤也と云も有又清良

豊高

手ぬききは方敵も隠しつゝ是ハ正教士居領の百姓一
竈つゝ多き多小其儘被置事ハ清良程こ人あると時こハ
分別違も有りと訾者も多うりけりねの小助ハ清良
近所ハつうひおれ吉ハ則真吉新左衛門ハ頼けらる是也
も他領より極くは批判ト云れとも清良聞て吉ハ幼少
てをるけく敵ハ小矢を射りけし志奇特成されとも大勢
よて踏付うりしハ力不及是以彼うおくれとるふ何れ
小助も戦つうねて生捕らまき一全く恥辱をぬく残る者
共ハ親の為ハ命銭軽く一討死す一吾類仕方也とて小助
ハ後ハ覺右衛門と改名して吉ハ小七と名乗一廉の者や
成る忠節を盡し勤なり

安並藤蔵黒瀬殿削制礼事并直行与公廣卿確執
濫領之事

今年ハ西園寺教古のまゝ本領残なく取らるれ十八郷
の諸將と別して教古奉り黒瀬氏門前子市を以て小
川貞成西ノ川定信川原測ちて一歸新泰まで彌輕萬をな
せり是ハ元親三好笑序と取合家中なせハ前ハ元親ハ隨
ふ武士大方見合て元親を背き後大友ハ鳴津と取合無隙
伊与分へ取懸る事不叶依て伊与分静謐に成り西
園寺家も明暮酒宴遊興を事とし無益の殺生等好む雪
月花を翫ひあふりよりの川に人々の心移り替りて是
ハ追従し媚をなすりたる間黒瀬殿より村里に制札を立
殺生をたのしむ鷹狩川道遙鹿狩を好まざりて家中其外
白人迄是をもて所をひりり郡内直行領と西園寺領の
堺多田と鳥坂の百姓鹿の矢論を出し是ハ六七人々死
り此事募世の中の習い色々の雜説を云ふし郡内を

豊後

ハ宇和方より寄を奉ると云又黒瀬殿みてハ大洲より攻
来ると元沙汰頼たれハ手子用心の〜め領主〜兵
とめ〜れハ黒瀬殿を守護〜り土居よりハ土居藏人善
家八十郎安置藤藏子半武者五十騎相伴ひ去年此各始よ
り廿日替りよそ詰〜り〜る志〜も何事もな〜りけ
れハ安曇徒然なるま〜よ山田治法〜見廻〜道は〜
諸鳥の多き我見て藏人〜問〜ハ山田熊前永長あ〜
ハ留場あるゆ〜道鴨鶯多し其制札を見る〜此東西南
北二里の間諸鳥を取鷹をつ〜ひ〜る〜あひ〜ハ為過錢
直者ハ三百足又者ハ百足出〜〜則其錢ハ見付〜る者
ハ為褒美可被下置と書り去ル年土居三島大明神の祭礼
ハ喧嘩なきや〜りの制札を市左衛門書謀〜と黒瀬
殿近習衆大ハ元沙汰〜り〜今此制札ハ其過錢ハ見

付出者よ〜下置とあ〜ハあのみ多き鳥を思ふ様〜打て
我〜兼て知〜る者〜訴人〜出〜〜〜錢を〜〜
申せハ藏人聞て尤也併其錢を兼て知〜る者よ〜〜
事〜也鳥を打辱思〜り〜亦て其過錢ハ黒瀬殿目付れ
者よ〜〜せよ〜云々れハ安置若き者ハ〜所〜走め〜
り雁鴨青鷺等とせば〜め思〜あ〜〜打〜り〜ける道ハ
て案の〜〜目付見あ〜ひ〜〜め〜れハ心得てお〜と〜百足
の錢を出〜其後も二三度出〜〜我黒瀬殿近習衆聞て妬
ま〜〜思ひ目付を呼尋〜り〜〜あ〜〜の由〜市ハ近習
衆寄合たと〜始〜法を〜〜過錢を〜〜
二度〜ハ出問敷事〜其制札を見あ〜〜わ〜る狼籍
上あ〜搦廻也惣〜て土居家の若〜も毎度如此の志事
と〜也以後の為なれハ中上〜〜て公廣〜一言上〜り

豊高将道

其内又藤藏出で鳥取打つるよりして西園寺教大の立腹
ありて藏人は其旨状仰付る藏人登城して山田沼法次
杖真綱に向て御苗場より出居り若者鳥を打申あつて黒
瀬教大立腹より状仰付り尤も奉存其者を決し申所は
御制札の錢百疋出し出へハ又若者鳥取打す過錢を見付
り若者新下之愷は在之由口こよ申子付て其謄様見届及
てと存御目付衆より尋ねらるるも其通より其過錢と
愷よりけり由申あ若者若くハ其錢をさし出し出へハ
鳥は打つても不苦と心得多上ハ菟角可中付様も無御座り
間乍憚御制札の今少文字を被加ぬへくしと申所は御座り
家より制札をせ見せらるるも其通より御座り野を呼
てよりそのめに高札をた立ちて我らにも見せらるる是
書直しへしとて札を削て改め立替るる安置あり科あけ

れに敢て何の沙汰もあらぬ黒瀬教大近習衆は是を聞て兩奉
行旅依怙を捌りつと云罵る中も制札の表誤あるを安
置は削りてさし出へしと云へきやうそありを家

宇和方より郡内へ取つく事

去程に郡内より鳥坂の在家を焼くしてて武士を出しこ
れを守りせりつは彼等の下人とも多田信綱は領内へ夜
なく来り畑は残る葦大根を引青麥を刈取て馬は飼な
とてこれハ村の者とも是を防ぐと云ふり後ハ家財雜具
とも盗り取行り信綱是を聞て出りて思ひ手勢三十
余騎引具し郡内侍は七十余騎を夜打しして鳥坂の在家
一字も不残焼亡はしこれハ即時に事出来て各多田口に
馳向ひつるよりして黒瀬教大出馬向きハ南方親安を始上
灘浦手の武士ハ野田平地に攻りつり野村魚成三間河原

豊高

瀨西の川の搦手に廻り藤次々峠を押し寄せしり郡内方子
ハ大野直重伴て喜谷治部太史高行彼是七百余騎馳重り
切所を頼て支られとも終は押破るまで直重高行ハ己ら
領へ引返し直行ハ籠城をされハ此三人ハ皆國中子居て
終は手いさき軍をたげまきにも合戦なる事あきハ諸方
へ加勢を出首瓦ぶられハ突掛り所をい悪られハ見合て
人あきよ扣へて自身手を破き殺さる事あきにあり此
度も只切所斗を頼て支るといへとも懸引あきなる事
如此破るまでと見しり西園寺家の武士共ハ土佐豊後を
引請継初は毛大敵の當りつを味方の十倍廿倍に敵ハ
川の事軍別する者大られハうは小敵をハ石屑て
攻寄を追詰日を終はあきうい在此所を放火し地蔵嶽
名城ありといへとも一時は梅破る人と押詰既は危くえり

處は道後より河野通直自身馳来り危くは扱られしはよ
りてほはゆき遺恨もあはれ當分の小事を下より云募
りし事あれハ淺くと和睦有る字和方皆く引拂たり通直
も次而るうら黒瀬殿一見まはるまきハ公廣卿悦び給し山
海の珍物を集め種々の馳走しそく之されたり今度軍は
働く者を恩賞行いきんと有るを清良通安両執事一申
りハ此度の事ハ事終初までされハ御恩賞可成成程の
事までもありすかハは小事はさも何ハ大切なる時ハ
何と云ふ事ハ一も只大方まで可成と申せハ尤るりとして
各召あつめく酒あつめくめてを歸されたり

和睦之事

毛利輝元と公廣卿手切を隆景清良分別を以て
安藝此毛利輝元と西園寺殿並て睦しと有る聊のうせ

者子付て不慮の所名出来天正八年此春より平二不通手切
を有しと勝山の通直郡内直行種こ子繕りれせれ公康
今困ひ給りすして其年中事調りさりし子細ハ西園寺家
の侍あましく天正七年此十二月と安藝より在陣したり其中
は鎌田三河守り加せ者上石宮内ハ中間と喧嘩して多く
の侍与方をあやまち其身ハ難なく乞ぬけたりおもかく
味方と何やまちて迎ふる事偏り主人三河守子恨有とて
傍輩の出入り成りり鎌田迷惑して輝元の執事所奉行な
とくおて藝州中ハ云ふ不及近國とも尋ねれとも何國へ行
く見しよりされハ上石と三河と可相果様子となりし
と久く思招ひ多くは正教一家中の者也あは躰のうせ若の
事ニ付兩人く迷恨を結ひし事苦く敷殊子徳の事あは
ハ諸事ハ子任尋ねむへきやうなるハ力不及我國

領内ありハちと尋出さる可有式と色こ子あさめ様子明
應の頃よりいまよと久敷天下乱て侍うせその百姓子
うきうき本主と背てハ他領の声續き一老里行朝夕目と
目と見合さるも是を罪と人事不叶して年月を送る世を
まハ他國うてハ経有所知りしと云とも輔く様とさるハ
うきうき増え任所何國とも不知ハ力あまうきハ本國へ歸ては
沙汰子すハと後ハ毛利家の侍も立交て取揃りハ毎
是非を悔ふ應ハ多時此うせ者嚴島より伊与方の者見
白くさると云間子所屋へ逃入り其後町人子付こし
頑んとしとも不預則いはくハ町代子届けさるハ町
代さると云なうハ心ハいさるハその川さるぬけさる
あれは此見付さる者り志ハ上石宮内ハ被官あれハのウ
せ者ハ包り傍輩のうきま也かれを見付て討さるハ久川

豊前

物言子ある事ゆはの限也と上石以て外に立腹しつれハ
此者又巖島へ渡りて所代よりめりりるを里所代是を関
もいさな疎畧子鷹言々多より宮内へ被官不詠町代も
切てくり落子ニヶ所負とて者とも集取也此者以
討殺より上石是を少強面目をうしめひ堪忍成りて其
子細成りめりる子所代言々多此者狼藉しりりて
つて伴方致取しめりりるれより何れ他領此事差角の金
義不傳ちれハ上石此後本國へき面目ありて子細せつて
書置て天正七年十二月十二日にお蔭列後控切て死より
る其以吉川小早川あ人丹波橋廣は在陣し其外事繁
き打節ちれハ輝元の耳もつて疾一向此事無沙汰也明是
ハ八年正月宇和幣のころに引拂ひ歸りる時西園寺教是
を關て大に逆鱗あり我手れ者加勢に頼りて上りて海軍と

無沙汰は打捨垂あ少事沙汰の限也然る此節とくすき
様あり所詮向後輝元と不通とてさきより外的事ありとて
それより不和の成て手切ありしを輝元より宇和へ押寄せ
思慮極を討果てへきより雜説しつれハ西園寺教少あり
とて思ひ軍兵を集めひとて軍此用意ありれとも先
利家より攻来る事もあつて其年も善を明る春よりれハ
小早川より清良方へ書れよて彼所代事余もいさす不届
千万ちれハ彼腹を切て可申と相定てるる様使を可被
持然由申来りあり此者思慮極一申ちれハかく成行て今更
それより不及輝元れとも無沙汰人といふ不通とて被て
用ひ給つちれハ其由清良方より隆景へ送事しりりて其後
清良方より隆景方へ申つりりるハ禍ハ下より起るとて
ヶ程此事よて其の山手切れ苦く後存る前也然るとも先

慶長御書

来御め在る事なきに何とぞとてあとの御和略を
少所より同被らせ者や御領内被尋求其上より所代を此方
へ送りせよと事せ分て申されし隆承也とて領内無
所余欲し終りせ若し尋出し搦取侍与へつらし一町代は
山本豊後其頃安藤子居たり見とて略せ切て事済
良隆承あるの裁判とて輝元公廣の和睦を事申るなり
なり想うて様之事に付能中も悪事なる世の習是皆ふ
余も事起り或は依怙長直ありて好方此遠恨とある
吉川小早川とて輝元の両輪股肱の臣世子かくきる事若
るれは彼等初より是取捌るに上石も命を為さん輝元
の中道も出来間敷を我國の砌他國に在之しゆ事延に
に及びしゆ之を毛利家の物の持能るに百姓の云し事
理の叶ぬ事いそを困し尊卑をさうとて政道正しくせ

ふと兼て其沙汰也雖に川除城普請をとりても小人且輕
或は百姓等の淺き者も諸事奉行と相談し其理
の多かり付長時は輝元の耳に達し人來りて彼所の堤
に築やう爰の土手の付様さるるよき仕様ありおし讚を
ハ輝元聞て是は我指圖あり又ハ奉行の形をとりありし
彼村の何某百姓此組の誰某足輕り分別を以て如此と
と羨美をさるるよき人ハ云ふ不及是を聞人毎に
過分と思ふ方事念を入假初も兼相とて是輝元取
將とる所以也大方ハ人の知を我才覺は奪ひ他を嘗自覺
あるに常れるに也皆と能得心を一一と清良近習の者
共と語られし也

輝元家兩川より清良へ使者之事

天正九年十月小吉河駿河守元春小早川左衛門督隆承より

り土居清良へ使有て因幡伯耆兩國へ將軍方より筑前守
秀吉日向守光秀攻入之由聞くは西園寺殿と毛利今
年滿和睦之事るは加勢後へいと申来れり清良其
旨を黒瀬殿へ申されは然るは各々うひひ申せ有るは
川て山田久枝上甲伊豆守ちと集り評定を以宇和領軍役
に武士三百余騎相催され法花津秋延今城兵庫頭能興家
藤監物を大将として土居より薄木三河守重宗より五十余
騎の兵を指添十月廿一日より宇和を打立あり因幡鳥取
の城より毛利方究竟の武士吉川武部少輔隆久森下出羽
入道道中村對馬守春次を籠置し筑前守秀吉古今
無刃の名將ありは廿日之内より攻むはて毛利方の三人
討死をさるはうらうら安藝の後詰も無益をさるは西川
お寄金義しるは去年正月始より播州三木の城を秀吉

破るは無二の味方三木の兄弟も切腹を丹州八上の城
は明智光秀は落され伯耆岩倉と羽衣石の城も前年秀吉
は攻むるはかく有ては中國廣くはしるは味方おくれ
て應て毛利家の難義疑有間敷先羽衣石南条勘兵衛を攻
落せとて毛利方の後詰案内に知るは是時より責守城を取
巻けり南条関ゆる兵もて敵大勢ありといへとも少も擬
疑せし城は踏まるとして秀吉の後詰を待居しり毛利方れ
寄手言々るは此小城一ツはかく大勢軍兵我費し守居る
事且ハ敵の後詰秀吉を思き且ハ智謀るきに似たり假敵
百万騎勢を以て後詰をとりしは此切な城をて追廻んは
何条事う有るはさるは岩倉をも攻落し兩城一帯は
取かくせしは山鴨左衛門尉をも攻むるは其時秀
吉數万の軍兵攻率て後詰有るは毛利方よりつまり

豊後國志

乃切取を支ふれいさ此りの秀吉も時を移して十一月半
より極月初迄日数廿三日ハ日く夜く小迫合なり元春も
名高き将秀吉ハ元来世子とく名將なれい互にたる
みを見合七度迄入乱を火花をちりし攻戦ふ中も西園
寺家の加勢上甲法華津家藤薄木各数度手柄成鎧を入て
相挑めい中國勢も是子恥く一入勸働いにより度く勝軍
志よりとて西川悦事無限毛利方も今度い羽柴筑前守
向ひけきい感陽宮の鐵壁もたまる間敷と諸卒是攻め
やふむ皮にいりい雪深をまいやて兩城の味方難多
乃ふを見搦て筑前守程の大將いり思ひてり早速接
州へ引りさるるい毛利方の仕合外聞ありと悦い秀
吉は神先を思きい桶狭間の事い後信なけきい西
城共い心い武いといも大軍は取囲を既よ一二の

擲を責破りき本城は詰寄けきい力不及南条も小鴨茂
降参を乞るるよよつて合戦たけけ搦別へ送りて城い毎
難ニヶ取共い毛利方へ取りいりり家藤監物歸陣の
後物語有るるを書付置今爰に記し平侍与方よ此度の
加勢も兩城取歸さきて首尾よりきい毛利家一入喜悦
而毎度西園寺家の加勢衆手勢は増たる働共感い入と獲
らさるい黒瀬殿の面目侍与侍の高名ありと諸人悦ひ
思ひり重

西園寺殿領鎌田三河守切腹之事

久良村鎌田の城主鎌田三河守は古来の武士小身たりと
いへども度々手柄を振り其名人の知る侍あり然るも
去年安藝の國に而かき者の出入り付無念義成ゆへ侍輩
意宮内は腹を切て其上西園寺殿毛利家と手切者い

ふよ川て此三州今よあろく黒瀬殿御前不宜其上土佐
元親と首尾方々内通する事隠さるうりり此の黒瀬殿
猶く立復あり鎌田と名きとも身は深あきは不勞と号
して山仕をいさへは逆心疑あり時日を移さる攻亡は
ととて公廣の旗本の若侍は仰て久良村へ指向する人々
攻寄きれとも此城要害よく四方の屏風を立ちたる如くそ
輻く多文へきよふるく城の用心きむく取籠り
木戸を堅め逆茂木を引て待たれたれハ島あつてハわけ
りゆく仕寄を付勢樓を掲んと巧めとも山高く谷深
くそれハ不叶徒に城を守り数日をわくり寄手も今ハあ
ぶく攻口ともづく面陣小屋を明著暗然として
日を送きは鹿苑猶あり遊ひたり黒瀬殿此事誠
関のゆへに小向く城剛として責得を割居ると

山野の遊獵言語同断也と使志き時よわらるる寄手
わらるる不目子攻懸り小城内子銃炮手き多くて後
引居敷く子射られの寄手若干手負死人出たり然そ
も城の一人もうらむるが哥りてよて櫓の寄手
を見たり近付ハ打倒し引くは狭間を開き見
居たり有時城より寄手の陣へ矢知を射る是を見
は内々黒瀬殿の近習秘教等陽々山家武士とも出仕
それとも無衣黨也衣紋つきり誰かま目也彼の
腰かみり何某の作法を知らる人の非難をいふに
被中突つてり矢の矢の矢の各別とおもひて
や衣紋立振返りたり能くくの具足の若様掛り口
の見若くは腰の括るる若神をてをわくく存念
おくはるる帰る遊真して慮さよま口惜と思

黒瀬殿御前

誰とも一友人宛出く是鎌田が若とも今打合て見殆一但
此方壺人より二三人懸く是は叶ひぬふま一幾人とも向
これ好一其為矢文を以て申入ふと極一の悪口書ちて
城中散く驚く事色もあつりこれに彼去年中國より一
不慮の首尾悪他國といひ其上余義心は任ふぬ一致なれ
ふあ成ぬまは元来剛の若ま一為る手柄世よかくきる
き者なきはのくる悪口とく色口惜と思ひあつり無左右
取くつる一其様もぬくあつりとも引とるへきいされも
るく遅退いりくちんと喫く居り此上子黒瀬殿支執事
らう土居上甲へ彼城を攻落さる一有るぬ一土居
ハ不勞とて再三辞退りるふあ一赤原野村皆田其
外浦手此武士子仰付く攻らるふあ一城中不慮近く
一もせ付後ハ矢一筋も射出さる一とくさくさくあつて

五十日あまり城の四方を圍てる斗を何の仕出さる
る事もなく今日も暮明日も百案一居る者さぬ
之がりあれば黒瀬殿より使梯のち成りゆくか
是飛子清良高頼有間病氣あて出馬難成ハ子勢と接つ
りつり一時は攻落さる一との事あればとて此上ハ
力あしと云ふあ人とあきいして上甲伊豆吉を誘引し
馳向ひ先手の寄飛壺人も不残責口を解さる一
然一ともく一是をのけくお土居江守を使さる一三河
守一云つりいせハ貴方去年中國一切復者一軍事武子の
定まる交りるを過き歸て今黒瀬殿一秘せり一日本
入魂者一傍輩の恨もあき面く子將一子を引矢をさる
されいつ迄うくて者んとの思意あつる一銀只今いり程
の働者とも曾て高名も成一とては振名とてむへき

義も何れ又後詰を待て難城一運を南うん孫もあし
然も貴方あると今日迄城を堅固に持てて
日來の武勇家子然も永くお城をりきるい
おぼろも終る糧盡力にゆき飢死しあつさる
雑人原の手まかり妻子眷屬迄さる目を見を行末
迄武名取釋されん事いひあふ被存る
只義を依て命を救ふといへとも妻子おのりさして不
も可存清良只今討手は指向日をさるも自分は何
の恨もあし能れ其と我の益も只疾妻子の
落着も定らぬ尋常は懐をさるる一牙箭雨多
今日人の上明日は身の上何時か急の事出来へとも
かき世の中子多しは事のよきと存し思急の極中
進むる如くと者もさる鎌田圍て只一言おあそく近來

而志の程甚世迄も難念過分お存ぬ然も妻子眷屬おの
事乍此上土居殿お入あそて早東ふ城より出山居寺まし
て腹を切く死するも数千の寄手数日を送り鉞戦を以て
曾て不緩落さる城を清良一云までかく速に持ぬし
軍程手の多きあかしく敵もあつて変化せしめか
あつてお鎌田かく成て城まらきまは則上甲伊豆お
久良村の城を預けらまきよりて久良伊豆守と
名のりらる

清良記卷第廿五目錄

一、重而中國江加勢之事
一、豐臣秀吉躰于西園寺殿清良江被尋事
一、杵臼程嬰之事
一、馬之杳物言事

清良記卷第廿五目錄

- 一、重而中國江加勢之事
- 一、豐臣秀吉躰于西園寺殿清良江被尋事
- 一、杵臼程嬰之事
- 一、馬之杳物言事

清良記

清良記卷第二十五

重て中國一加勢之事

天正十年午三月朔日藝州ヨリ西園寺殿へ三熊忠兵衛と云
侍と使者きて近日將軍西園寺殿へ突向有りと國との勢を被
催のよ、其聞一有然くハ輝元も丹波播磨兩國へ出張して
可相支の間又々加勢頼存のよ、委細は口上を伸りぬハ
黒瀬殿元親を事よせて加勢解退候しく、三熊中より
兵事として輝元を思慮仕御当地の次子身て自是直子土
州へ越元親へを其子細と中せとの書れ解多持余仕て其間
彼地へ孫越長曾我部へ其音不中として忠兵衛ハ土佐へ急
りる元親近年ハ將軍信長と不和よりつて三好松岸子河
波瀆岐兩國を充行りたるやの朱印有とて松岸元親取の
ひの家中ありたり元親輝元と中違ふて、悪うりるんと

清良記卷第二十五

清良記卷第二十五

思ひまじ輝元強きし、將軍此威も弱く松岸も共し便と
失ふと思案し毛利への返事に係る御大事なる元親と
先立て而加勢を毛仕へられし此表三好働出せし力不及
毎沙汰子羅成其某加勢ふ仕さへ残念に存せし何の故に
伊予方より加勢の留守を窺彼表へ踏入り申せし誓言を
以て望く約諾の返事志くれ、郡内宇和両所、徳山へ
河野よりの一左右次第に可羅立と返答有る翌日より
西園寺領内にて日來手柄を奪むる武士又若手此内にて
武勇の心懸ありき侍を擣ひ出として勝りたて八百余騎
集むる大將より土居清良南方親安兩子息基章是三人
三月晦日戊子辰の一天に宇和を立て中國へ趣け、郡内
直行し手勢三百餘騎引具し、河野通直より大野來島徳
居三人は二千五百余騎を外領内の武士手勢を引具し彼

是都合四千余騎勝山三津の濱あり、弘永此以前、安藝
備後一揚り陸地を成とく今度備前岡山に着て兩川より
の差圖をえ相待たる將軍方の先手は此頃天下に聞へる
羽柴筑前守秀吉六万余騎きて備中高松の城を攻むるに
毛利方より後詰として先手吉川駿河守元春三万余騎きて
不動ヶ嵩より出張し二陣小早川隆景五万余騎引率して萩
迦り峯に陣を取大將毛利右馬頭輝元は六万余騎きて三里
引さうつて際の際と云所平地より陣取り毛利方國
々所この押へは多の武士費て無勢ありと云とも都合
十三万余騎と云聞へる秀吉是を聞て敵は地戦を案内
者の大勢味方、他所無案内の小勢なり我此軍糧を以
敵付入りて少の間までと京都に旗を立てて出て、主君
信長の御庇又我末代まゝの恥辱なりとて江州安土へ早

戦記

馬やうつと加勢の事とそ然中なる將軍則惟任日向守光
秀長岡与市郎筒井順慶亦羽立郎左衛門堀尾帶刀池田伊
豫守父子高山左近中川瀬兵衛彼是都合七万余騎馳重り
互に對様の人数あり兩陣瞻合相挑時々足輕の迫合めて
卒示は熟きつゝたされは秀吉高松の城を急は攻め之
と接とせられは清水兄弟究竟の武士るる上近松左右衛門
尉難波傳兵衛と毛利家まで勝りて勝りて是輕大將に
鉄炮五百挺付之竈置きれは雲霞のよくなる高松を亦
拂ひ高松の五所三所の内へは上方勢をよせも自さり
りり秀吉名譽の大將まで諸方を巡見しとかく此高松の
城は力責は成りては此川を際て水攻めとあ
りしは諸將いふくは此水せきとめ水混は成りきやと云
しは秀吉下知をもつと川下を筑切水を徳させしは案は

ふ違水次才はせき揚さなるは湖水は異なるは清水兄弟
難波近松其外心は武しとりへとも此水は弱つて無為
方六月四日より岩切腹して残る軍云を助より吉川が早川
秀吉若禰を見え將軍信長は恐きねとも往て其人了て天下を
も知へは大将の度量あれは今度幸にして和談あれは
と輝元を諫められはともかとも兩川相もよへはと有より
兩川より秀吉へ無軍を乞ふと相談し秀吉も今日日本は
此毛利家よりかの大敵あり此度の軍は一生の大事あれは
継一城二城責落し國郡切取ても不殘是を事は入ん事
余程難義成へはと互に雄雄と案し居る半は此合戦に
軍勢散て京都無勢なる透間を考へ明智日向守光秀京
都本願寺は信長はまゝなる攻めせ六月二日乃朝即時は
將軍押はしは勝を切て奉むと急と告来る事隙あり

戦記

一う秀吉より西川へ其旨を有の條子申され現在主此敵
と闘へば搦あり先其度其陣を引く明智日向守を遣討し
其後免も角先其へさし如何と有るれも毛利家にも逆風
の帆を揚る心地折を幸と候し毛利方の者とも是れ備子
天の此ある幸也其競を以て上方路を打破り都におて出
まきむれり天下を志るしめさし事掌を指りていと勇
の悦者多りりされ共小早川隆景の先秀吉の神を見る
に通例の人ありは彼元来滝川久助の内竹阿弥の子也
さある人當年いま三十五歳にしてをやかふ大名と成六七
万騎の勢を我儘に決るハ天の此へ運強き事好方ありは彼を
まされり清良をうつつ弟此事いれ有へいと密謀あ
りしは清良曰此沙汰昨日より承及て後め仰今秀吉秀吉
近年の間はかゝる大名と成天下は肩をなすある者あり秀吉

の被向所悉く落城し靡き不隨といふ事れし稀きも持詰
手よりつへき所ハふ意も頗出しなるといふ自滅し終は彼
子に属する有様誠は火の煉あるにつき水は下りるよる
りてくるあるハその時へと天下を掌乃内は握り四海を恣
にせんハ其人は限りと見へて後又信長乃切腹偽なる
事も難斗其實否をも不正此費は棄て秀吉を打亡るさ
りせいか一つは敵のとりとなし事も心得くくしあり
將軍切腹は事極りしうと云々即時は秀吉を遣亡し京都は
旗を揚るれんとも難斗信長ありたれおハ弥秀吉を
退れ隨ふとの多かるハ明智暫時勢を振ふと云々秀吉は
亡はされん事踵をめぐりて是を以て案されい當
時秀吉と雄雄を決てくま事いれ有へきと申せば隆景
さしを存きざるにありし兩自分も實見を尋向事全く諫

意は不存ゆへやと云へば清良の面目且も西園寺家迄諸
人重く思ひしに理りや相輝元より羽柴へ此迄事より上方此
様子承知入さず沸然傷くるへに容許乃事ハ聞きて早々沸
上浴有へしと有りければ秀吉殊の外脱着有るはしむる白後
和睦ししに全く如在に存間敷と誓紙を調へられ輝元より之
人質を出さまで秀吉を赦せ日母継ぐ攻せられ今度輝元
同心きて中國の侍事上ハ亡君信長公を弑ししに惟任を我手
りかけし誅罰せん事時日を以て之にうへと悦喜不斜輝
元より西川の執事と以て今度信長の吊合戦追付沸告左右
待存也就夫加勢おもに儀何程にても武士致可差進み間
無沸遠慮可被仰義之のほり相志之沸用可承と申され若
も秀吉悦て沸志のどし不淺存る然る先只今ハ鉄炮五百挺
弓三百張のあり五十本のあり給へとあれば寄き間の事として

其敷を揃て出されり土居清良ありもしむる京都の様
子就見てかへまると真吉甚内堀口通り助を輝元の登里大
將吉川加賀守日添て上さるる秀吉ハ六月五日ハ備中高
松を立退しり輝元よりの人質を今度ハ先隆景日頑を
うととてかへされしり相も肝ふとき大將うなとて人
舌をうしひりりかく無事と成るうよすり諸方より此加勢
も皆六月末日歸陣しりり

豊臣秀吉跡を西園寺殿清良一被尋事

去程に清良も中國より歸て黒瀬殿へ出仕は公廣御對面
あり相今度上方此様子ハ如何にと沸尋ありり清良
申るるハ秀吉輝元の年合兩度見聞乃処しりれも名將の
事よりハ勝劣難申候へとも輝元ハてや二代の大將まで
前後の事を氣つういり筋を念をのりり付軍れしんを

存多ぬ者、少鈍き様子存宅利方ハ秀吉ヲ恐るとも可申哉
秀吉ハ兼て聞しめし及りしごとく、滝川久助ヲ被臣竹阿弥リ
子ヲとて、寛仁大度ノ器ニ當て、今度も先上方勢ノ十三万
騎ハ秀吉ノ差圖ニ志せし見して、其係る仕出ノ大将多きを以て
次方、威ノ増事龍ノ雲ニ有りしごとく、相繼仕損し、これにて
本ノ藤吉即成と思ひ定て、弓箭を手強くそけく取故、二
振も見事ニ見へぬ、秀吉ニ命限仕出此侍ヲ天道ノ命ニ叶ひ、最
負あるゆへ命限ハ思ひの外ニ、其取事に於てハ、軍旅ノ粧迄
もきよく、かさつある働を致危き事をも、かりこさるゆへ、心子
叶く仕仕、海勇事多くぬハ、諸率ハ其危く、かき川子、そそ
天道ノ最負ある故、運子兼ると云事迄の吟味ハ、なかくて
是るを本大将と云へき人あれども、いそぎよく手強く弓箭
のちれやう哉と思ひ付勇を寄せ、弥勝も重り草木の根に

勢を以て枝葉初り枝葉乃昌る隨て其根蔓ふとるごとく、弥
増り成申と見へて、右子申とく古来の侍ハ、交ある仕出
の若者子怪家を取て、我事おね置先祖迄一乃不孝也と
弓箭を志めり、致ぬゆへ、助目子ハ、何の仕出此者小懼て、臆
病ありと思ひも、言にも、何ハ、次をまつと諸率心弱く
かくれて、竹方一か付へきと見合、國郡并の武士皆其仕出
の才へ付を以て、善惡の懸なく、差當る機子兼て、武士ニ限
りて、庶民醫陰僧佛の輩迄も、上手にまゝするは、さなきや
人子用るは、勝せざるやうに、そめけハ、諸人、是ヲ隨ふと
見へて、汝右ハ、かくいかりし、なと、今をうめし、となし
うる文とも、多くぬ、一とも古今共き事ありと見へて
孔孟も、是を深く、歎き置、水て、汝國子、盗人有家子、胤有りと
申とく、天地世界之間に、ハ、切くのとき、類あくて、ふ叶ぬ、況や、以て

百年より多かり國亂は學問なるといふ後にも見ざる者多く
得て我愕として義を背き信を失ふ事尤もて後今秀吉を
そのとくある運強き仕出の武士は古来の家のはたふさ
き申へて定て此頃ハ明智日向守と信長の御子息達の中
みて弓箭を御座り大方ハ秀吉ありてハ外ハ誰を
無之哉柴田修理兄弟三河の松平家康も弓箭上手やと
承及み得て甲斐の源氏武田信玄乃跡四郎勝頼信長と三
代乃弓箭を執る互に精力をつくさるると申せ共當年
三月十一日子勝頼父子討死ありて終ハ十日斗ハ信長切
腹さるるとハ勝頼光秀も内通やと申せハ今八十日命ありて
らき後者二代念ハ孝の信長の果を見之後ハ何にもあられ
る子おぬてハ父ハの孝行我も妄念を拂ひぬるハ何れ
より近き今度備州高松の城代清水長左衛門兄弟難波近

松井与十郎五人の者今半日の命延るハ秀吉輝元乃無事
子逢て彼尋命助るハさおと諸人申事に後是を存せ
ハ只何事も限あると見へて後ハ如何に申すも愚ハ
罷成者ハ光秀秀吉の孫負も運次方またハ後ハ何事
も子簡ハ何れも物もて不定と心得ぬまハ誠にて不違
とて去れぬと申事斗ハよく何れも物もて後ハ信長の切腹
を長曾我部元親候て又要出可申間阿讃の兩國を疑を
く治てヤクハ御當地を望むまハ山田久枝の人とも兼
て御用心者ハ此清良ハ元親もさハ去るハ其後ハ不
断念願ハ去と申ハハ公廣御向ハは相釋元ハ如何ハ
く秀吉と無事有ハと尋ハハ清良承ハハ後輝元秀
吉ハ相挑雌雄ハ何れも難分内高松の城を水攻りて
清水難波近左等討死落城セハ其方術の勢ハ中ハ秀吉

の智謀の如し言詰りし伸くしに改身ありしを輝元方兩川
も只とにわくは無事を乞て和談可然と思ひ此取捌の使
僧彼方共方走違ふ最中子將軍明智り為子裁さし給ひ
しうと秀吉方へ注進有るれ其悪左右を輝元へありし
は、秀吉より被申子付て折を幸にあり和睦調ひ西陣共
圍を解秀吉ハ上治さるる然きハ今天下の主する人無之
へハ只世の如し様を見合せしと毛利家も思ひ取内
當時秀吉の威勢子あふりしハ天下を秀吉乃指引と
可成と西川も存し察し隆景ハ輝元之後子ハ秀吉子隨ひ大
方七八ヶ國斗の主として國政治めしうにて了り阿しん
れと籍子某に叫申はると申は公廣卿申はるとお輝元と
九州大友嶋津の取合ハ有間あ武否と有清良暫思案し思ひ
はあする解きてされしハ中國子も申はひハ輝元少

手弱くおえし考れハ大友も嶋津も浅く見ありて軍を強
く仕かけあし上方に心安く成りりハ豊後薩摩
乃口軍後重くありんと口こにつふやきありしを有る
事と新存ありと申時西園寺教重くお伴子しつ成行へ
うや尋らる清良中らハ今度將軍切腹有に付ても河野通直
手浅く成てあり子細ハ元親ハ武略ハ信長のいきほひに付て其優
追従せし子息を安出り詰させ信の字を申請其上四國拜領
の朱印を戴きしとて裁し裁掎め教代の河野領ハ伴子
を大分押領しありハ通直乃身子成てしうんと口惜く被
存し然る所ハ近年元親優る事を信長あきて以乃介不
和ありけしハ三好ハ河野讃岐兩國を給く此兩子ハ元親と
三好玄岸と取合最中にして兩國の武士も今ハ又過半三好方
歸系し元親危き折ありハ其費も多て北伊豫をとりか

河野古老の侍共最前元親子通直と見合と強き元親方子
成るる者を一く礫りかあるる一と耳をそとて承る
小兩年の間其ゆはなくと今又將軍之ひめれ付て
さこそ三好方力を敵し和泉國一を引ぬるらんさるあか
ぬえ元親時を得ると蔓出可申度眼や運攻身とゆ
かりかり指當る度と延るとされたる通直あれ文件
の逆徒元親方と成る河野子等をさる事疑るされハ
河野家も頼の爲く長成て其勢を連るる通直元親の爲
も亡さるる然るも能仕合とて輝元の旗りて成て修り
属し中に入るし乍去輝元も七八ヶ國の主とあつて水と通
直も共日輝元の主人と仰りてそのまに修業して本に
安堵さるる大略ハ半分三ヶ一も割きて今河野家の家老
共の願知程漸く取上りの堪忍中とるる致さるる今のと

河野家老

く下手けの年延るる度と大方弓矢取をすし河野家
ハ断絶可仕哉と云を存みく定りて是ハ一軍をせぬ大将
ハ此を海一軍のありぬ度をして恥を漏し中事先例
是多し武士のこゝろ工高農子多まて其所子庇して是
き事の吾をせぬと云は海一軍をさるるものよて其お
河野家つれと云りて郡内直行るとハ一事も取間通直
同前子ぬく一と云うあはハ与那ハ此當家ハ一所の所思案所
まて此産物と云を存みかくの申出へとも世の有さぬと
成行可申哉心得くく明智日向守將軍を輔く討つると
よとも三河家康加賀利家越後系勝小田原氏直羽柴筑
前守秀吉此ゆり將軍の此子違多ととも古も名将勇士の
息違其又討さるる其子親族天下を取かりし例異朝に
とハ杵臼程嬰の謀ありとハ承不及信長の子息の事も心に

河野家老

くかゝる右五人の大名おハ滝川左近将監一益杯の間是
光秀を討亡此へをれハ又天下大に私を弓矢の止時を及
海下其内も秀吉の師斗了を西度見申て其外ハ名斗承
く不存然共秀吉程の鋒先強きハ無之也へも安藝輝元回
意の上ハ猶く羽柴は權付者不可有之をのほく筑前守
天下子なる^{さうと}清良愚業りの存及中國まで隆景を
とも其下心とつて見えておつて宛又某都の軍其の様子
とも見えて業ととも真吉甚内堀口過り助を輝元より秀吉
への加勢の中へ差別はつてお彼等頓て其帰此京都の
脚能お知す中へ聞召被而推量の^{とく}秀吉利運子孫
成て天下の指引在之^とお々々を為丸殿一被仰合彼御肝煎
を以て筑前守へ馬をつらう^と不可然存及此印清良存寄
も毎に咄せと申せハ山田久枝も又龜甲とて西園寺殿へ万の

而持南申儒者も共^と秀吉の尊業承けも清良の物語も
天下無雙の名将也今度落着次子御入魂あれ^と幸大
納言殿に面出上ハ何の子細も^{あり}と申せ西園寺殿秀吉
不随ひ^と又ハ安ん^{とも}能て有^とて人^は勝^はて^との
越て馬をつら^と甲をぬ^とも^もつ^と也^も只^は天^運次第と被仰る
^ととも愚^もと又^も強^も人^も聞^こう清良申^るハ人^は勝^はて^との
仰も而尤也乍去^{たり}と^も事^を不^被成^して人^は不^勝也
^とを世^に此^些人の嘲も^も多^くも天下を引請て^いても成
間お申^る多^くれ^も思^ふ事^を更^に乃^も書^きて^おか^し
も^もつ^と今^も私^にて^る世^の中^もも^も誰^も天下^を知^りま^ら
世を治めん事曾^ら志^すぬ事^を申^ハ皆^皆言^ふて^おハ勝
者極め^りと^も事^をな^して^退出^しる^事

豊後守

杵臼程嬰の事

管唐士秦の代は智伯趙盾と云らる二人趙國を誦事年久
一或時伯己は趙盾の爲に取巻る夜明るに討死せんと云ふ
る時智伯の臣杵臼程嬰と云らる二人の者を呼寄り我己の
運命極り趙盾を圍むぬれぬに必討死せよ一汝等我は眞寧の
志深く今夜ひそり子城を逃出さく我三家の孤をかくり置
と長しと趙盾を亡り我生前乃死を雪むへと宣らる
杵臼程嬰是を聞臣等主君とすも討死せん近しと安
一三家の孤を隠して命を全せん事遠しと難し雖然為
臣道豈易と取く難を於んや必君の仰ま可随とて杵臼程
嬰竊に其夜約て城を抜るなり夜明るに智伯忽に討死し
て残る兵もあがりしり多年諱ひし趙の國終に趙盾
り随り子杵臼程嬰二人は智伯の孤をかくり置ると云らるに趙

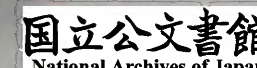
首是を以て討んと云る事類也程嬰是を忍びて杵臼は
向く申らる舊君三家の孤を以て此二人の臣は佗よりは
れは死して讒を欺くと生て孤を取るとい何より難る
一杵臼云死し心の義向ふ死す定り生ぬ百慮の智を盡せ
中々金然れは吾生を以て難しとて程嬰は我難し付て
命を全とす一兩邊は安意は自ら討死せらる一と云一
杵臼は許諾を以て謀をめぐりて死しとて杵臼我子の三
弟を成るを舊主乃孤なりと披露して是を懐抱程嬰は主の
孤三つを成を子子と云て朝夕そを養育しりかくて杵
臼は山深き柵を隠し程嬰は趙盾をたしに行て降参る處に
由り趙盾猶と心を置る是をゆきとて程嬰重て申さるは
臣は元智伯の左右は仕て其行跡を見しと終に趙の國を失つ
る人やと云れり是は君の徳慮を例に智伯をかくれ給へる

事千里を阻つる故にや、くも趙者は、使へずと乞、豈亡國の
先人の為、有徳の賢君を謀るんや、君若我をして、臣する道、
許され、亡君智伯、孤三軍、り、る、此、有、柀、旧、う、養、育、ふ、く、
隠し置、所、我、具、ま、り、君、是、を、う、り、あ、ひ、て、趙、國、を、
永、く、安、か、し、め、め、と、そ、や、め、る、趙、者、是、を、聞、て、お、い、程、嬰、ふ、偽、
我、臣、と、な、ん、と、信、し、て、程、嬰、を、武、官、を、授、あ、ふ、近、く、は、つ、ま、り、
ま、し、柀、旧、う、隠、し、る、所、を、委、申、せ、し、尋、聞、數、千、騎、の、兵、を、
指、つ、り、し、是、を、召、し、ん、と、柀、旧、兼、て、相、斗、し、事、あ、れ、し、ま、
睦、の、上、る、三、軍、の、孤、を、殺、し、て、亡、君、智、伯、の、孤、運、命、拙、し、て、謀、己、
ま、あ、り、し、ま、ぬ、と、よ、し、つ、て、柀、旧、も、腹、切、て、死、り、趙、者、今、を、
後、の、代、を、顧、ん、と、し、る、者、の、あ、り、て、後、に、程、嬰、の、心、を、不、置、刺、
大、祿、を、あ、と、く、高、官、を、授、け、國、の、政、を、治、さ、し、ま、し、
孤、程、嬰、の、家、を、成、長、し、り、は、程、嬰、忽、ち、兵、を、發、し、て、三、年、の、内、に、趙、

者、を、亡、し、終、に、智、伯、の、孤、を、趙、國、と、保、ち、り、此、大、功、併、程、嬰、の、謀、よ、
り、出、し、り、は、趙、王、是、を、賞、し、て、大、祿、を、与、へ、ん、と、せ、し、
不、受、我、官、を、辭、り、祿、を、得、て、生、を、お、さ、し、り、柀、旧、と、共、に、謀、し、
道、を、あ、り、し、と、て、柀、旧、の、尸、を、埋、し、古、き、協、の、前、に、て、自、ら、叙、の、上、
に、伏、し、り、サカ苦、ま、を、埋、れ、き、實朝、廣、し、と、し、斬り、例、に、稀、也、
増、て、日、本、小、國、殊、末、世、を、あ、つ、て、也、父、を、殺、し、君、を、弑、し、己、り、
榮、耀、を、樂、ん、と、し、其威、勢、の、強、き、方、を、志、し、り、已考、
を、る、を、卑、む、る、世、中、あ、れ、此、亦、も、何、に、成、行、へ、き、我覽、曾、て、
を、り、知、り、し、

馬の香物事

今度中國陣事ゆ、かく各帰國し、其上黒瀬殿あり、
渡、り、を、終、ひ、上、下、共、に、目、出、度、悦、奉、存、と、て、清、良、より、松、浦、内、藏、進、
を、使、り、て、公、廣、卿、乃、以、姉、靈、陽、院、殿、へ、彼、國、名、名、物、を、之、依、問、
を、使、り、て、公、廣、卿、乃、以、姉、靈、陽、院、殿、へ、彼、國、名、名、物、を、之、依、問、



微少進申とく三原酒一樽まいつとらきつゝ其陽院殿内院
則内藏進の對面ありしを簾を歸りせしき今度中國より何
事の御敷事ありしやと尋らる内藏のつれおとけを申
せ侍るるらん其馬の背の毛を申せ人共大きに周章翹を
て其しを土居家と共静めて其の伊予分の上下に申す不及
中國考と云、殊の外御考家乃沙汰を撥申被君の御外聞清
良の面目あり某も大慶仕する事も御前もはしりて
御嬉しく被思召せしと御舌をききして御申とて罷
出られ其陽院殿女性の事おれをいふしく思われ又誰そ
も馬の背乃物せしむるを正敷見しりしとて其まてふ
しとて其のまは是れを事とてしとて内藏を呼びしれり
内藏申するは是は其の御末るる物語をみ唯今ハ山田寒月
和尚の使の糸の同帰重弟てし其様を申上りて出ぬを後

陽院殿
御前
御敷事

其陽院殿より清良へ脱の御使のりにも内藏を別して御傳
言ありて誠は馬の背の物と言ふしやとて其のまを
と尋らるり内藏進前日かつ其儘の物を申するを承て其
しとて申する靈陽院殿日御してしりてなて七月末に
度て内藏を名ししれ共かく申延してまいつされ清良方へ
御文を送るしとて其の清良内藏を呼とせ是はしりし
もなれ内藏進申するは伊予よりひ加勢の馳走のしめを
利根より付しとて三徳忠兵衛の中間と河野家の侍新
中六兵衛の中間と馬の背を奪ふる出入の事を承て
申上るる有の候中をれは女性を奪ふるといふ事
を中の沙汰の陽と清良方とて内藏の出入とめは是事
此程内藏の痛り中事とて適宜仕在るしとて御使のり
内藏進酒は給酔る無量方事を申上り其段宜御耳に入

陽院殿
御前
御敷事

と給へともかくされたり其内子美陽院殿堪へり西園寺殿
一兩申あり此内藏をけやくるて聞やうとて茂原に御座
ありより八朔の御礼の時足利の清良出陣に内藏
をつきて出先江雪を以て美陽院殿へ此事語りしになき
虚言此より申されしにけしきも事もしを少西の四
りまりしに内土居の侍共を黒瀬殿近習に始ましく悪
うる思ひを多より告ぐ此尾をまをたて此事をさうく
内藏はけりてせしむるはきとたてあり女房達も
福のこ中なるしはめやて尼御前黒瀬殿一兩出あり公廣は
此事足利の御座ありと御座あるゆへに何やと此
事成とも申て危此はとも慰め女房共の望とも達してて
うせよとありをきし清良も祥あるに所なく黒瀬殿御座
内藏進をとも出され多る此頃より西園寺實光のあり

備前守
備前守
備前守

諸將の奏共其外何事は付ても大方に女房達もて被りて
たり殊今程に美陽院殿おのき人あり猶以多くの女を
集められ今日と女房達百斗中居半女迄に三百人あり
其外侍老若貴賤廣縁の居餘り大庭迄並居る黒瀬殿
内藏進の仰ありしにその事のあつた庭のまじり堀のかけ
まへも陸奥の老若あり大音もてかかれとも事假初に
かせし事幕もかく夥敷成りしに何事せり申出さる
と土居龜貞人こち平に汗を掻り西園寺家の若殿原に
彼り恥辱今見よと叫び願せおこめしに居るをり
内藏進元来題の皮の厚き事ふ適に越る者あり係家
大場の晴るありしちつとも不眠居長高に成扇取直
大音にも抑今度中國陣に伊予に北加勢に武士四千余騎の
馳走の為に輝元あり侍十人新指添内先手御當家一使者に系

備前守
備前守
備前守

毛利方の侍等へも又其とく尋らるる忠兵衛云々の盗人
此方此考るとい安し若河野家の考なりを以て存る
さうなるういふ跡ありて將の明中格より西人頼有ると残る
侍を申さる間さういって論人の使を立らるる此旨の様を
見ると左きとのよきとる旨也双方馬屋の考は左のきとる
その考哉と伺とく尋らるる中国方より中く左きとる
かきて其者跡よりこそ其考明日其證據合をて見せ
考へとゆいしやうは中をり侍方より左きかきたる旨
ありは是れ及他人の旨をて考へし其の旨は右きかき
則此類をて考とて残るる旨をて考へし引くへて見ると
少も不違藁の色迄もゆりふ所あり左兵衛藏人も三熊り
中間の盗人ありふ行當り是れ思ひの外也思案うてて
かく本人を知りて迷惑し伊与方の利運あれは中国方ふ

此旨を預け置んそのをと中へり作去論人の方三千人ふ
阿まうて各傍輩を目前に見し中へりし中也今一度證據を
見せしめて中国方此侍又伊与方の侍の馬の竊六七十取合
を緒ともかちり切て論の旨を伺とて接和しけ輝え方
の流河野方の侍二三人呼て其前を彼竊とも投散し論
人を兩度も呼出し見知る旨をそれと云け是れ六兵衛の中
間も切もあやまると取らるる忠兵衛の中間に見えとる
ろとへてとりそこをひたり其後六兵衛論の旨をさそを
りせ又後の證據に出たる旨共さ尤うせ見え藁の色
節合大さ引てさるに強さも少も不違其外の旨共一様
ありは各別の事れとい毛利家の侍おむく明白成兩人の掬
哉とて忠兵衛の中間を成敗して考ひたる其後陣中にて又ハ
脇の民百姓童共迄も度々西園寺殿御流は志事左り

農
田
書
庫

農
田
書
庫

して人の目を驚かすに及ばず景清良は縁者あり物類を以て集るといふ言はれしをいれあきあきも何となく口々に讚中此事旅まで何まり満更に存器歸吳陽院様にもやく申上御悦の色を拜に申度ある取周章さゆき言り物を申てはと申上及而免成被下まかると申されは黒瀬殿を始尾御前不乃申満座の人々大笑あり上下とよみあひたりさて内藏進は黒瀬殿御盃を給て近來めつしき物語を聞何より懸誠は馬の沓物のひたる同前も理非分明はとられは汝り偽は何となくとてとの外真はいつて機嫌も今より清良の不審ゆきされとあきと吳陽院殿より一重下され内藏進多きを直に退出したり其後清良中されは彼に彼に御所まで謂まねとも率尔あうかある事申出せしに清良より手此者の高名旗頭の耳其外数百人の御前にて然

内閣
蔵書

より黒瀬殿近習の若殿原共動されは清良者とも心聖と与へん面目を失ひせんをさすに次あるは此物語も理非の掬をもさき後學にもある人々一具一重て土居る者ともを獲得する為也とて笑て悦されなり

藏書
印記

Vertical columns of handwritten Japanese text in a cursive style, contained within a red-lined border. The text is arranged in approximately 15 columns, reading from right to left. The characters are dark ink on aged paper.

